

共助社会づくりフォーラム2015 in 茨城 議事録

内閣府政策統括官（経済社会システム担当）

共助社会づくりフォーラム2015 in 茨城
議事次第

日 時：平成27年10月 2 日（金）13:15～16:30

場 所：茨城県三の丸庁舎 3 階水戸生涯学習センター大講義室

1 開会挨拶

2 基調説明

「共助社会づくりの推進について～新たな『つながり』の構築を目指して～」

3 基調講演

「徳島県神山町での空き家などを活用した共助社会づくり」

4 パネルディスカッション

「茨城の空き家などの地域資源を活用した共助社会づくり」

5 閉会挨拶

○司会 定刻になりましたので、ただいまから「共助社会づくりフォーラム2015 in 茨城」を開催させていただきます。

私は本日の司会進行を務めさせていただきます茨城新聞社の細谷あけみでございます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

ありがとうございます。

初めに、主催者を代表いたしまして、内閣府 参事官付き政策企画専門職の福田紘一郎から開会の挨拶を申し上げます。

○福田政策企画専門職 ただいま御紹介いただきました、内閣府の福田と申します。

本日は、お忙しいところ「共助社会づくりフォーラム2015 in 茨城」に御参加いただきまして、まことにありがとうございます。

開催に当たりまして、一言御挨拶させていただきます。

平成25年度より、内閣府では、地域のきずなを生かした共助の活動を推進するために、

経済財政政策担当大臣のもとに、有識者による「共助社会づくり懇談会」を開催してまいりました。

共助社会とは、少子高齢化や地域経済の疲弊といった地域固有のさまざまな社会課題に対して、我々行政だけで解決しようとするのではなく、地域住民、地縁組織、NPO法人、自治体、企業、教育機関など、多様な主体が一体となって取り組み、地域を支えていこうとする社会のことです。

我が国の経済を再生し、成長を持続的なものにするためには、全ての人材がそれぞれの持ち場で能力を生かすことができる全員参加こそが重要です。自助・自立を第一としつつも、活力あふれる共助社会をつくっていくことが必要であると認識しております。

このような観点から、共助社会づくり懇談会においては、各地域における課題等を考慮した議論を行うべきだと考えております。

そこで昨年度より、全国において共助社会づくり懇談会の地方版として開催することといたしました。昨年度は11カ所で開催いたしましたけれども、今年度はこのような懇談会を全国で9カ所予定しておりまして、本日、茨城県での開催が第1カ所目の開催となります。

本日のテーマは「空き家などを活用した共助社会づくり」を考えようというテーマで、坂東様より基調講演をいただきますとともに、その後、パネルディスカッションを行う予定でございます。茨城県において皆様方とどのように共助社会へかかわっていくかについて一緒に考えていく機会となっておりますので、当フォーラムの趣旨を御理解いただきまして、皆様におかれましては積極的に議論に御参加いただければ幸いです。

後ほど、内閣府の共助社会づくり懇談会において平成27年3月に取りまとめられた報告書の概要について、私から簡単に御説明をさせていただきます。

最後になりましたが、当フォーラムの開催に当たっては、茨城県、大好きいばらき県民会議、茨城NPOセンター・コモンズ、地域のパートナーシップを開くSRネット茨城の多大なる御協力をいただいております。この場をおかりいたしまして、関係者の皆様に感謝し、心から御礼を申し上げます。

限られた時間ではございますが、有意義な会になることを期待しております。

以上をもって開会の御挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。(拍手)

○司会　ここで、「共助社会づくりフォーラム2015 in 茨城」の主催団体からの出席者を紹介いたします。

ただいま御挨拶いただきましたが、内閣府、福田紘一郎でございます。(拍手)

茨城県生活環境部次長、桐原泰弘でございます。(拍手)

大好きいばらき県民会議理事長、幡谷浩史でございます。(拍手)

特定非営利活動法人茨城NPOセンター・コモンズ理事、江崎礼子でございます。(拍手)

続きまして、基調説明「共助社会づくりの推進について」に移らせていただきます。ス

ページの準備をいたしますので、会場の皆様はそのままお待ち願います。

お待たせいたしました。ただいまから基調説明を始めさせていただきます。

内閣府、福田紘一郎様から、「共助社会づくりの推進について～新たな『つながり』の構築を目指して～」をテーマに御説明をいただきます。

それでは、福田様、よろしくお願いいたします。

○福田政策企画専門職 御紹介いただきました内閣府の福田でございます。

4 ページに「非営利団体と自助・共助・公助のイメージ」という図が簡単に書いてございます。

一番左側の、いわゆる国や自治体、これが公助のそもそもでございますけれども、そこから右側に行くに従って、公的な支援制度などで支援している、そこまでを「公助」、一番右側のビジネススペースで提供されているものを「自助」、両者の間で、ビジネススペースでも公助のでもなかなか手当てをし切れていない部分を「共助」という形でイメージをしていただければと思います。

次に、「共助社会づくりに向けた対応の方向性」ということで、政府としてどういう位置づけをしているかを御紹介いたします。2013年から14年、15年と、いわゆる「骨太の方針」という政府の重要な政策方針の中で、地域活性化の重要な政策の一つとして、共助社会づくりを政策としては位置づけております。

続いて「内閣府 共助社会づくり懇談会」について概要を御説明いたします。

平成25年4月に内閣府の経済財政政策担当大臣の下で開催している有識者懇談会で、座長が中京大学の奥野先生、ほか、委員の方は合計で11名でございます。茨城県からは、今日は御都合により御欠席でございますけれども、茨城NPOセンター・コモンズの代表理事の横田様に委員として出席いただいております。

25年度については、NPOの人材面、資金面、信頼性の向上の3つについてワーキンググループを開催して、それぞれ問題点等について報告書をまとめました。

26年度、昨年度については、この後御説明いたしますけれども、共助社会の課題や目指すべき姿について検討を行って、報告書を取りまとめております。

続きまして、26年度の報告書、今日のメインテーマになりますけれども、それについて簡単に説明をさせていただきます。

内閣府の共助社会づくり懇談会においては、共助社会とはどういったものなのか、その目指すべき姿などが明確ではないといった御意見がございました。そういった御意見を踏まえまして、26年4月から、共助社会の担い手の取組と課題、さらには目指すべき共助社会の姿について議論を行いまして、27年3月にこれまでの議論を取りまとめました。

現在の我が国においては、人口減少、少子高齢化など、枚挙にいとまがないほど様々な課題がございますけれども、このような状況にあっても日本経済の再生及び地方の創生に繋げていくためには、自分のことは自分で行う自助の精神に立ちながらも、身近な分野で多様な主体が、ともに助け合い、支え合う共助の精神で活動することが重要でございます。

国民一人ひとりに活躍の機会や場所があって、個人の多様な価値観や意思が尊重されながら、新たな繋がりが構築されて全員でつくり上げていく社会、これが目指すべき共助社会ということで、この報告書では提言をしております。

続きまして、この報告書では、主体ごとに課題を整理しております。

まず、地域住民が第1番目の主体ということで整理をしております。地域社会を構成する最小単位でありまして、年齢、職業、性別、職務経験などが多様でございまして、地域で最も貴重な資源と位置づけております。

その地域住民の共助の取組における課題といたしましては、地域社会に存在する課題の認識、つまりは当事者としての自覚をまず持っていただくこと。

2つ目といたしましては、共助の取組によって、より良い地域社会を構築していくこと。このためには、NPO及び行政が中心となって、意識醸成や場の設定に努める必要があります。

続きまして、ある世論調査の結果を御紹介していますけれども、社会の一員として何か役に立ちたいと思っていますかという問いに対して、大体7割弱の方は社会のために何か役に立ちたいという意識はございますけれども、それでも、やはり現実的には人任せというところが現状でございます。

次は2番目の主体として、地縁組織についてです。地縁組織は、地域の課題解決や公共サービスの一端を担っている最も身近で最大多数のコミュニティーとして、重要な役割を果たしております。しかし、現在は、連帯感の希薄化や役員のなり手不足など、組織が弱体化しているところもございます。

そこで、課題といたしまして、若者や新規の参画者が得られるように、地縁組織の活動内容等の情報発信をする。次の課題といたしましては、他の組織と連携して地縁組織等の活動の活発化をしていく。

次に、3番目の主体として、NPO等について課題を整理してございます。

様々な課題を抱える人達に寄り添いながら機動的・多面的に活動し、課題解決に取り組むのがNPOでございますけれども、課題といたしましては、ボランティアや寄附の受け入れ状況についての情報発信。我々はNPOを支援するNPOを中間支援組織と呼んでおりますが、その人材育成や財政基盤の強化が課題となっております。

次に少しデータを御紹介をさせていただいています。内閣府の「市民の社会貢献に関する実態調査」の中で、寄附について、なぜ行わないのかというところを聞いたところ、寄附をしても実際に役立っているとは思えない、寄付先の団体へ不信感があり信頼度に欠けるなどという回答が多いです。

寄附を行う場合に必要な情報については、法人の活動内容や、寄附により期待される効果などとされています。

ボランティアの妨げとなる要因は、時間が無い、経費負担が重いということは置いておきまして、その次に多い要因は、ボランティアに関する情報が無い、手続きがわかりにくいというものがございます。やはり情報発信をすることが寄附やボランティアをやっていた

だくためには重要な問題になるのではないかと考えております。

次に、NP0等の最後の課題でございますけれども、社会の期待に応えるためにも、自らが地域課題の発掘や共有を行うことでございます。

次に、4番目の主体、企業について説明いたします。

大企業、中小企業を問わず、生産活動やサービスの提供、雇用などを通じて社会経済の発展を支えている主体であると同時に、地域や社会に様々な影響を与えております。

課題といたしまして、人口減少や少子高齢化などの課題に直面しておりますけれども、企業の成長・存続のためには、企業も社会のニーズに応じて、地域を支える担い手としての企業の役割が高まっている。

次の課題といたしましては、CSRなどの社会貢献活動を通じた企業の持続的発展。

続きまして、自社の社会貢献活動について積極的に情報発信や、社会貢献活動を通じて従業員の士気向上等を図っていくことが課題となっております。

次に、ソーシャルビジネスが5番目の主体ということで整理をしております。

営利を目的とする企業が社会貢献活動だけでなくソーシャルビジネスに取り組む事例や、NP0等がソーシャルビジネスに取り組む事例がございます。法人格を問わず、ソーシャルビジネスに取り組む方達をその重要な担い手と捉えております。

ソーシャルビジネスの課題といたしましては、ソーシャルビジネスの経済的な自立。

また、事業を進めていくに当たっては、やはり事業者の経営ノウハウの向上が課題。

続きまして、地域の中小企業によるソーシャルビジネスへの参入も課題として提示しております。

6番目の主体として、地域金融機関。地方銀行や信用金庫等です。地域金融機関は、融資の促進や活動支援を通じて、地域の活性化や経済成長を実現させる際には大きな期待が寄せられています。

課題としては、金融機関のノウハウや情報網を活用したアドバイザーとして地域金融機関の果たす役割の高まり。

次の課題ですけれども、金融機関、NP0等との情報交換・相互理解の促進。NP0等がなかなか融資を受けられないということをよく聞きますけれども、金融機関の方がNP0等に対し余り理解していない。理解のある金融機関も全国にはありますけれども、理解のない金融機関もいるという御意見をいただきますので、課題として理解促進を入れています。

次の課題といたしまして、地域金融機関が中心となって地域の連携プラットフォームを構築すること。

7番目の主体として教育機関を挙げております。大人も子供もそれぞれの立場で、皆で力を出し合いながら、それぞれにできることを行って地域社会に貢献していくという共助社会づくりを進めるに当たっては、やはり教育機関に期待される役割は大きい。

大人になってなかなか地域活動等に余り参加しないという要因として、子供のころになかなかそういうことを経験したり、真面目に考えたりする機会が少なかったからではない

かということで、教育機関が小さいころから真面目に考えるような機会や経験をさせるような役割を持つべきであろうということで、課題の18番と19番を提示しております。

産学官民連携等で地域興しなどで大学が拠点になっていたり、生涯学習機会の拠点となっていたりしますが、そういった意味で大学が社会貢献活動の促進の拠点になっていくことが課題であると整理しています。

最後の担い手として、8番目に行政を挙げております。

行政は、地域住民ニーズや課題の多様化・複雑化などによって、行政単独であらゆる問題・要望にきめ細かく対応していくことは現在困難な状況になっております。行政も様々な主体と連携協力して、地域住民等の自主的な取組を通じた課題解決の重要性が課題。次に、行政内部での縦割り等を廃して、行政内部で連携したり、近隣の自治体間での広域連携の必要性が課題。

次に、NPO等への活動の助成の効果等についても調査する必要があることも課題。

共助社会のデザインや地域の将来像のデザインやそういったところにはやはり行政がコーディネーター役を担うことが期待されているということで、コーディネーター役として期待される行政職員ということで最後の課題として取りあげております。

続きまして、目指すべき共助社会の姿として、「3つの姿・27の道筋」を本報告書では提示しております。

2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会が我が国の活力を取り戻す励みとなるものとして位置づけられていますので、今まで整理した課題を取り組むことによってどういった共助社会ができるのかを、2020年を一つの目標として、目指すべき共助社会の3つの姿を提案しております。

3つの姿は、つながりの構築、地域の活性化、参加の促進で、その実現に向けて27の道筋を提案しております。

まず、つながりの構築といたしまして、9つの道筋を提示しています。様々な主体が繋がりを構築していくことが目指すべき姿の一つでございまして、地域課題の解決について話し合っ、できることから取り組む場として、「共助社会の場」と内閣府の共助社会づくり懇談会では呼んでおりますけれども、そういった場を設けていく必要がある。そのコーディネーター役としては、行政やNPO等の中間支援組織の存在が必要不可欠でござい。その場づくりに関する道筋やNPO等の果たす役割について、道筋として整理をしております。

次のページを開いていただきますと、2番目の目指すべき姿として、地域の活性化に関する道筋が提示されております。これまで24個の課題を挙げましたが、その課題解決に向けて、各主体が連携したりそれぞれが基盤強化を図ることによって地域活性化に繋がるであろうということで、それぞれの道筋を提案しております。

3番目の目指すべき姿は、共助社会づくりに皆さんが参加していくということで、参加の促進を提案しております。

様々な主体の共助社会づくりへの参加が促進されていくにあたり、参加の手段として一

番身近なものは寄附とボランティアでございますので、寄附とボランティアの促進や地域における資金循環に向けた道筋などを提案しているのがこの19番から27番までの道筋になります。

地域社会が抱える構造的な諸課題を克服するための処方箋のあくまでも一つとして共助社会づくりを進めることをこの報告書は提言しております。

多様化、複雑化した地域社会の諸課題に対する処方箋は多様でありまして、解決までには長い時間を要します。このため、従来のような行政中心の取組だけではなく、様々な地域社会の担い手全員が主体的に参加して共助社会をつくり上げていく必要がございます。

その際に重要なのは、あくまでも個人の多様な価値観や意思が尊重されることであって、支援する・支援されるといった一方的な関係や、他者への依存では無く、互いに支え合おうとか、多様な主体による有機的な結びつきを構築しようとか、そういう、ともに解決していくという共助の精神が必要です。

一つ一つのつながりの新たな構築ということで、それを通じた思いの共有や同感や共感こそがそういうコミュニティー力の向上や諸課題の解決に向けた大きな原動力になると考えると、報告書では取りまとめております。

共助の取組を行うに当たっては、それぞれの地域に合った取組を検討して、無理のないところから取り組み始めていただくことが必要だと思いますけれども、この報告書の本体の方には事例についても御紹介しておりますので、報告書に目を通していただいて御自分の活動の参考にしていただければと思います。以上で説明を終わります。

ありがとうございました。(拍手)

○司会 福田様、ありがとうございました。

皆様、いま一度、盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

続きまして、基調講演に移らせていただきます。ステージの準備をいたしますので、会場の皆様はそのままお待ち願います。

それでは、基調講演といたしまして、坂東幸輔建築設計事務所主宰、坂東幸輔様から、「徳島県神山町での空き家などを活用した共助社会づくり」をテーマに御講演をいただきます。

坂東様は、徳島県神山町で空き家再生プロジェクト「空き家町家」を、徳島県牟岐町で「出羽島プロジェクト」を行うなど、空き家の再生を通じたまちづくり活動に取り組んでおられます。

それでは、坂東様、よろしくをお願いいたします。

○坂東氏

皆さん、こんにちは。坂東といいます。今日はよろしくお願いします。

私は「空き家再生まちづくり」といって、空き家を生かしたまちづくり活動を徳島県で行っています。今日は徳島県神山町の事例を中心にして、このほかに牟岐町や他の地域も御紹介したいと思っています。

皆さんにお聞きしたいのですけれども、神山町のことを聞いたことがあるという人、いらっしゃいますか。手を挙げてください。

2割ぐらいいらっしゃいますね。では、少し詳しく目に説明させていただきます。

まず、私の自己紹介からですけれども、私は徳島県の出身です。神山町のすぐそばの徳島市内で生まれました。

東京藝大というところで建築を勉強しまして、スキーマ建築計画という東京にある設計事務所で修行しました。スキーマは今、清澄白河や表参道に出来たブルーボトルコーヒーという人気の店を設計しています。

その後、ハーバード大学に留学し、2010年に日本に戻ってきて、東京藝大の助手になりました。そのときに自分の設計事務所と、お互いに設計事務所を東京に持っている建築家同士で神山町で活動する建築家ユニット、バスアーキテクツ(現在はBUS)を設立しました。

現在は、東京の吉祥寺に自分の事務所を構え、バスアーキテクツも主宰しています。実は、昨日からなのですけれども、京都市立芸術大学で講師を始めました。他に、東京や京都の大学で非常勤講師もやっております。

私の人生の中で一番大きな出来事が、2008年に起きたリーマンショックです。ハーバード大学を卒業して、世界中どこでも就職できると天狗になっていた時期があったのですけれども、ニューヨークへ引っ越して就職活動をしようと思ったらリーマンショックが起きてしまいました。アメリカ中の建築のプロジェクトは全部ストップしてしまいまして、2年間ぐらい無職でした。

そのときに、大きな企業名や学校のような組織に頼って生きることについて自分の中で疑問を感じるようになり、もう少し自分の手の届く範囲のことをやっていきたいと思うようになって、地域で空き家再生などをやっています。

神山町についてですけれども、空港があるのが松茂町というところですが、そこから大体40分ぐらいのところに神山町があります。

このような感じの風景の中に神山町はあります、いわゆる里山です。徳島市内から車で40分なので、結構アクセスは良いです。人口は先月5,862人。少し6,000人を切っています。高齢化率は46%。道を歩けばおじいさんおばあさんばかりです。主要産業は農業で、スダチの生産が日本一。あと、梅も有名です。

こういう普通の里山ですけれども、これは先月かもうちょっと前にアメリカの『ワシントン・ポスト』という新聞に神山町の記事が掲載されました。ここでどういうことが書いてあったかという、神山に行ったらアメリカのポートランドという今すごく注目されている都市と同じ雰囲気がすると紹介していただいています。

まず、神山町で何が起きているかと言いますと、普通、過疎の町は絶対に人口が増えることはないのですけれども、神山町では2011年に、転入してくる人、移住してくる人が、大学進学だったり就職で町を出ていってしまう転出する人を上回ったのです。社会動態というそうですけれども、社会動態の人口が12人増えました。これで非常に注目をされまし

た。

どういう人が入ってきているかというと、若者だったりクリエイターなどの移住者です。他には、神山村に、東京や大阪などの都市部に会社を持っている企業がサテライトオフィスを設けるようになったのです。それで人が来るようになりました。

その背景として、地デジ化するときに東京ではスカイツリーを造って地デジの電波をタワーから飛ばすようにしたのですけれども、徳島県はそうしませんでした。もともと地元のチャンネルは3チャンネルしかないそうです。NHK2つと四国放送。しかし、子供のころは多くのチャンネルを見ていたのです。それは、大阪や神戸からもらい電波、海を越えてアナログの電波をもらってテレビを見ていたのです。

地デジ化してしまうと電波の距離が短くなってしまうので、3チャンネルしか見られなくなるという問題がありまして、徳島県全域にケーブルテレビを引いたのです。同時に高速インターネット網も引きました。

このため、大変に田舎の町なのですが、インターネットが非常に速い。特に神山村は超高速のインターネットを引きました。地元の人が言うには、人の走っていない高速道路みたいなものだ。東京だと高速のインターネットがあったとしてもたくさんの人が使うので余りスピードが出ないのですが、神山村のインターネットはかなり速い。理論値100メガが出るという噂です。

そういうインフラ的な背景もあるのですが、もう一つとても大切なのは、地元の神山村ではなくて、NPO法人グリーンバレーという民間のNPOが活動しています。そこの理事長の方が大南信也さんです。

そこでのキーワードが「創造的過疎」。過疎はしているのだけれども、楽しく過疎していきましょうというような感じのキーワードで最初に立ち上げました。特に人が減っていくときに、がくっと大幅に減っていくと問題が起きやすいのですけれども、減るにしてもだんだん緩やかに減っていきましょうという考え方です。

あと「やったらええんちゃう」。これは、アメリカのナイキというスポーツメーカーでは「JUST DO IT」というのですけれども、その阿波弁版です。とにかく、迷うのではなくてやってしまいなさいというようなことです。

あと、「ヒトノミクス」。これはアベノミクスのもじりですけれども、神山のコンテンツというのはB級グルメやゆるキャラなどではない。神山にはおもしろい人が来ているから、あなたも来て、会ってみてください。そういう人と人の繋がりみたいなものが神山のコンテンツなのですということをおっしゃられて活動されています。

具体的にどういうことをしてきたかというと、最初に始めたのが「アーティスト・イン・レジデンス」です。17年ぐらい前からやっているの、今年、ちょうどアーティストが来ていますけれども、国内外から毎年3名のアーティストを呼んできて、神山村で作品を創ってもらいます。

これは「隠された図書館」といって、神山村には図書館が無いのですけれども、神山村

民だけが使える図書館。しかも、神山町民が人生の大切な3回のときに、気になっている本とか、思い出の本を寄贈できるという、みんなで造っていく図書館などを造ったり、あと、森の中のアート作品などが残されています。

アーティスト・イン・レジデンスの活動をしていると、アーティストがだんだん神山町を気に入って、住みたいとなってくるそうです。もしかしたら神山町にはアートだけではなくて移住の可能性があるのではないかということに、グリーンバレーの方達が気づき始めます。

2008年に「イン神山」というウェブサイトをつくるのですけれども、アートの活動をしているので「神山でアート」というページが一番ページビューが多いのかなと思っていたら、実はその隣の「神山で暮らす」というところが一番ページビューがあったそうです。

実は私はこのウェブサイトに関心しました。2008年、リーマンショックが起きたときに、本当にどうしようかなと思っていました。東京藝大の出身なので、ちょっと建築家を辞めてアーティストになろうかな、隣の町だから入れてくれるのではないかなと、すごく甘い気持ちでこのウェブサイトを見ていて、その隣を見たら、1万円で古民家に住めると紹介してありました。

これはすごいと思ひまして、2008年にちょうど、ニューヨークに住んでいたのですけれども、京都で結婚式をやりました。そのときの結婚式はさんざんなもので、新郎は無職でといった紹介をされるのですけれども、結婚式後に神山町に夫婦で行きました。そこで大南さんと初めてお会いして、古民家で1万円で暮らせるのですね、良いですねみたいなことを言っていたのです。

そうしたら、大南さんはアメリカのスタンフォードというところで勉強しているので、すごく気に入ってくださったのですけれども、まだおまえは神山町にくるなと追い返されたのです。その本意としては、まだ神山町には建築で活動できるような場所が無いので、入ってきても活動するフィールドがないと言われて、もうちょっと頑張っておいでというので背中を押してくださったのですが、2010年に東京藝大の助手になったときに、では神山と一緒に活動しようと言ってくれました。

こういう感じで住む部分で神山が注目されて、人が増えてくると今度はサテライトオフィス、先ほどの仕事の環境を作ります。IT企業の方は働く場所を選ばないのです。このため、このような感じで川に足をつけながらラップトップをやったり、ハンモックに寝そべって仕事をしたりということが出来るのです。この上の画像がNHKの『クローズアップ現代』で取り上げられてから大変注目を浴びたそうです。

働く場所ができると、今度はランチを食べる場所が必要になってくるということで、古民家を改装して、ここはもともと酒屋さんだったので、フレンチビストロを女性オーナーがやっていたり、他には、大阪から家族で移住してきた彼らがピザ屋さんをやっていたり。徳島市内でおいしい店を探そうとすると難しいのですけれども、神山に来るとおいしい店があります。私は、色々な方が見学に来たときに、いつもこのお店に連れて

行くおいしいお店です。

あと宿泊です。泊まる場所が必要になって、最近、7月1日にWEEK神山という宿が空き家を再生して、スタートしたのですけれども、宿泊施設もできました。

ここが面白いのは、夜7時に皆で一斉に乾杯するのです。知らない宿泊客同士と一緒にテーブルを囲む。その経験というのはとても神山町らしいですね。色々な人がたくさん訪れる町なので、そこで初めて知り合うのですけれども、皆さん何かいろいろな技術を持っていたり考え方を持っていたり、面白い人に出会えるので、神山の経験を凝縮したような場所ができています。

次に若者です。神山塾といって、ハローワークのシステムを使って職業訓練を神山で行ってしまおうというものがございます。これは、今、6期まで行われて、しばらくお休みしていたのですけれども、7期が再開することになりました。

神山塾のとても良いところは、神山町はITができる、アートがつくれる、デザインができる、そういったスキルを持った人だけではなくて、大学を卒業したばかりの若い人達でも、神山町でお金をもらいながら自分のやりたいことを探せるのです。そういった人達がIT企業の働き手になったりここで起業してデザイナーになったりというような、人材を育成する場にもなっています。

このような感じでざっと、神山プロジェクトといわれるグリーンバレーの方達を中心として行われているプロジェクトを紹介したのですが、私達バスアーキテクツで空き家を再生している事例を幾つか見ていただこうと思います。

最初に改修、2010年に藝大の助手になったときにやってほしいと言われたのが、この長屋の改修です。築80年の長屋ですけれども、こちら側は駄菓子屋さんだったところを雑貨屋さんになっています。そのお隣の指物大工さんのおうちだったところが3年間ぐらい空き家になっていたのもので、ここを改修しました。

もともとここは商店街で、1955年ころには40軒近く商店をやっていたのですけれども、今はほとんど閉じてしまっていて、この黄色いところがオリジナルの場所で、赤いところは、仕事を持っている人に移住してもらうというワーク・イン・レジデンスという仕組みで移住してきてもらった人達のオフィスです。

こういう状況の中で、ワーク・イン・レジデンス、仕事を持った人にどんどん入ってもらおうということで、ブルーベアオフィスを改修することになりました。2010年の8月に1カ月かけて学生と地元の大工とで手作業で空き家を改修しました。

こういう感じででき上がりました。

グリーンバレーさんからの仕事は設計料は出ません。でも、そのかわりに、駆け出しの建築家である私に好きなことをやらせてくれました。唯一やってほしいと言われたのが、廃校になった木造の小学校で使っていたときの建具があるので、それだけ使ってほしいと言われて、あとは自由にして良いということで、自由にやらせてもらいました。

このような感じの内観で、下が土間になっていて、上が吹き抜けになっていて、一部ベ

ッドルームになっています。ここに住みたいと言ってくださった方は東京にオフィスを持っていて、別荘オフィスとしてここを借りたい、自分が使っていないときは地域で住んでみたいクリエイターに貸し出して、神山に作品は残していくような場所にしたいという思いを持っている方でした。

実はこれがサテライトオフィスの考え方はしりになると思うのですが、まだ、そのころサテライトオフィスというのはなくて、1年間ぐらい映像作家の人が住んでくれて、ここに彼女を連れてきて、子供もつくって、今では別の場所で神山に移住してくれています。

現在使っているのが、実は先ほどそちらにいらっしゃった江崎さんの会社のソノリテさんで、24時間東京とインターネットで接続して仕事をしてくださっています。

サテライトオフィスの先ほどのブルーベアオフィスのプロジェクトですが、私と一緒にニューヨークに行った須磨さんという建築家がバスアーキテクトの1人で、彼は東京出身なので、徳島で夏休みを過ごしてみたいという思いで一緒に活動を始めてくれたのです。彼は東京での仕事もあるのに頻繁に徳島に行っているのです、おまえは何をやっているのだと聞かれて、神山という面白い場所があったみたいなことを言うと、自分も連れて行って欲しいと言った人がいて、それが、今、たまにCMで流れているのですけれども、Sansanという名刺管理の会社の社長の寺田さんという方でした。それは慶応のSFCで須磨さんと同級生だったという繋がりがあるのですけれども、その寺田さん、ITの社長さんが神山へ来て、大南さんと会って、この自然環境に触れて、2週間後に自分のサテライトオフィスを造ってしまったのです。

このように、ブルーベアオフィスがきっかけになって、サテライトオフィスというものが始まりました。

それから、2011年、12年とどんどん企業が入ってくることになるのですけれども、使える空き家が無くなってきてしまうのです。このため、古い工場が空き家になっていたのを、そこを活用して、皆で使うシェアオフィス、コワーキングスペースを造ろうという話になりました。それが神山バレーサテライトオフィスコンプレックスという建物です。

このような感じの内観ですが、もともとは縫製工場でした。620平米あります。でも、使えるお金は800万円しかありません。だから1坪あたり4万円しか使えないという改修工事だったので、ちょっと大南さん、それは難しいですよということで、この一部分だけ改修することにしました。残りの大きいスペースは、成長するオフィスという感じで、とりあえずおいておきましょうという話になって改修したのです。

これは外観です。

中はこういう感じです。デスクを一つ、1カ月単位で借りて、集中して作業ができるスペース。こちら側は1日だけ借りるとか会議で借りるみたいなスペース。奥に見えているのは多目的スペースです。

このような感じでガラス張りのパーティションがついて、お互いに何をやっているかは

筒抜けになっています。

ここがかなり色々な目的に使われるようになりまして、今、ここにプログラマーだったり3Dプリンターができる若者が常駐してくれていますし、自治体、神山町以外の徳島県の別の自治体、海陽町というところがここにサテライトオフィスを構えたり、あと、明治大学や徳島大学がサテライトキャンパスとして使えるようにオフィスを構えたりしています。

あと、このミーティングスペースは、ヤフージャパンみたいな大手のIT企業が自分達の開発合宿というのを年間何回もするらしいのですけれども、そういう場所に使ってくれています。

面白かったのが、結構改修はしたのですけれども、もともと古い建物なので、雨漏りする部分もあるのです。そういう雨漏りする建物なのに、四国4県の知事が集まって知事会を普段は恐らく立派なホテルでやっていると思いますが、ここでやってくれたのです。

その家具を学生と一緒にワークショップで作りました。要らなくなった家具を譲ってくださいといういろいろ集めたのですけれども、集まってきたのはタンスばかりで、畳の上で使う家具ばかり。それをオフィスで使えるように、足をくっつけてキャビネットにしたり、テーブルの天板にしたり、色々作りました。

このように揃えました。普通の事務機器を入れるのではなくて、神山ならではの家具を入れるということも喜んでもらえています。

建物が建っているところはこのようなところです。鮎喰川という川があるのですけれども、その川沿いの、本当に山の裾野みたいなところです。

今までその2つの仕事というのはグリーンバレーさんから頼まれてやっていた取組ですが、プライベートな企業からも仕事を依頼されるようになりました。それが「えんがわオフィス」という建物です。

東京でプラットイーズという映像の会社があって、3.11以後に、違う電力圏でバックアップセンターを造らないと、何かあったときにテレビの放送をとめられないというので、会長さんが色々場所を探していたのです。一般的に、企業誘致はうちに来てくれたら幾ら出しますよ、何々を優遇しますよといったことが普通の企業誘致だと思うのですけれども、神山町の場合、何もしなかったのです。来たいなら来て良いよと。その姿勢が気に入ったということでここに決めてくださいまして、古民家をまるまる土地ごと買ってきて、我々に設計を依頼してくれました。

できたオフィスがこの「えんがわオフィス」。プラットイーズさんの会社のコンセプトというのがオープン・アンド・シームレス。この建物もオープン・アンド・シームレスにするというので、古民家なのですけれども、ガラス張りになっています。外とオープンに繋がっている。あと、シームレスです。縁側を作って地域とシームレスに繋がる、そういう建物を設計しました。

実際、縁側がかなり大きいので軒も伸ばしたのですけれども、ここは、地域のおじいちゃんおばあちゃんが野菜を持って遊びに来てくれたり、広場では、神山に阿波踊りの連が

あるので、その人達が年に何回か踊りに来てくれたり、プライベートな企業の庭なのですけども、何か少しパブリックな使われ方をしている、そういう不思議な場所ができています。

これは夜の風景です。やはりガラス張りにしたのはとても正解で、今まで色々な企業が入ってきてくれていたのですけれども、中で何をやっているかわからなかったのですね。だから、地元の人にとっては、都会からたくさん人が来ているけれども、何をやっているかわからない。でも、えんがわオフィスでこのようにガラス張りにしたことで、夜、働いている様子が全部見えるのです。そのおかげで、地域の人達も、ああ、みんな頑張っているのだなということがわかる。

あと、すごくよかったのが、空き家が足りなくなると先ほど言ったのですけれども、空き家はあるのですが、皆さん貸したくないのですね。空き家は皆さん価値の無いものだと思っているのです。でも、こういう感じで改修できるのだよという事例を見たことで、では自分も使ってもらいたいという人が出てきて、今では500軒、新たに使える空き家が発掘されたそうです。

あと、えんがわオフィスには敷地内に蔵もありまして、ただ、会長さんが買われたときに、もう火事で焼けてしまっていたのですね。そこを直さないともったいないというので、このような感じで、一部ガラス張りの蔵のオフィスを造りました。かなり眺めの良いオフィスです。ここは蔵なので音も静かで、集中して作業ができます。

人も、蔵と母屋で20人ぐらい働けるのですけれども、もうちょっと人を増やしたい。あと、4Kを今後徳島で推進していきたいので、4Kの試写室が欲しい。あとは、古いビデオテープなどをハードディスクにしてアーカイブしていきたいというので、現在は、蔵みたいなアーカイブ棟というのを造って欲しいという依頼があって、アーカイブ棟を造りました。このような感じですね。

お隣は後で説明しますが古い劇場の寄井座というのがあって、えんがわオフィスがあって、蔵オフィスがあって、アーカイブ棟があって、こういう感じで神山に新しい広場ができたという感じなのかもしれません。

先ほどヤフージャパンさんなどが来ると言ったのですけれども、神山は神山温泉という場所があって、そこに泊まることはできるのですけれども、もっと働くところに近い宿泊施設はできないかというので、先ほどのえんがわオフィスの会長さんが新たに会社を作りました。そこで造ったのがWEEK神山という旅館です。

先ほど神山バレーサテライトオフィスコンプレックスがあった川、鮎喰川、実はこの後ろに少し白く見えているのがコンプレックスですけども、そこの前に民家がありまして、そこの民家を改修して食堂を造って、私達に新築で宿泊棟を造ってほしいという依頼をしてくれました。7月1日にできたのですけれども、このような感じの、川に向かって全面ガラス張りのゲストハウスです。

中はこのような感じ。朝起きると全面に鮎喰川を感じられる、そういう部屋です。

こちらは我々は設計していないのですけれども、ピザ屋さんを設計した方がここの改修をしました。先ほども説明しましたがけれども、皆で7時になったら乾杯する。シェフは日替わりで違うのですけれども、色々な人がシェフになります。

私が行くとよく会うのは神先さんという方で、かんちゃんと呼ばれていますが、かんちゃんは神山塾3期生でした。もともと京都で料理をやっていたのですけれども、一度くじけます。他の仕事をやるのだけれども、余りうまくいかない。そういうときに神山塾に出会って、半年間修行をして、やはり料理がやりたいと思うようになって、修行して、今では立派なシェフになって他の地域でも活躍しています。

このような感じで、神山塾や神山という環境は、一度くじけた人間、私もそうですね。リーマンショックでくじけて、そういった人がもう一回再生できるような場所でもあるのです。

あと、先ほど出てきましたけれども、古い劇場の寄井座の再生計画というのも学生達と一緒にワークショップで考えています。

このような感じの内観です。昭和4年に建てられたのですけれども、ここで大きな火事がありました。その火事の際に、災害の復興のために、地域の佐々木さんというお医者さんがお金を出して、他の人にもスポンサーを募って、皆にエンターテインメントを供給する場所を造りました。

しばらく劇場として使われていたのですが、その後、映画館になって、縫製工場になって、それから空き家になっていたところをグリーンバレーの人達が再生して、こういう場所として使われています。ただ、もう本当に古くて、何かあるたびに雨漏りしているし、土壁も落ちてくる。なので、皆で直したいと言っているのですけれども、なかなかうまくいかない。

ただ、そういった状況をもっと未来をイメージしやすくするために学生達と一緒に町の人や持ち主に提案をして、こういう感じで使えますという絵を見せているような段階です。

これは古い建物なので資料が無いので、皆で実測して図面を作ったり、皆でディスカッションをして町の方にアイデアを提案したりしています。

ある一つのチームが提案してくれたのは、寄井座だけではなくて、商店街全体を巻き込んで劇場商店街というのを造りませんか。空き家に劇団員が住んでもいいし、大工さんが大道具さんにたまになるとか、まちぐるみで劇を作っていくような商店街はどうですかといった提案をしてくれました。

その中で、実はここに出てくる「大工・大道具の家」というのが後々えんがわオフィスになる建物ですけれども、神山は本当にこういう感じで、妄想を言っていると実現していく場所なのです。このため、本当に若い人達が自分達の夢をかなえたいというのでどんどん移住してくてくれるのだと思います。

去年行ったワークショップで、えんがわオフィスができたので、最近では縁側に座って劇を見るような、ちょっとこういう張り出したテラスを造っても良いのではないかと、そう

することで、方杖というのが建物についているのですけれども、その方杖を伸ばしてきて耐震補強して、そうするとちょっとデッドスペースができてしまうのですけれども、その上にステージを造ることで、より使い方を拡張する形で寄井座を再生していけるのではないかと提案をしているところです。この縁側に座って皆で劇を見る、こんな夢を今、見ているところです。

これは先ほども説明しましたがけれども、Sansanのオフィスを設計は須磨さん1人でやるので、これは私の作品ではないのですけれども、紹介しておくと、古い牛小屋があるのですが、その中にこのような感じで鉄骨とガラス張りの箱を入れたのです。えんがわオフィスなどを改修するときは、しっかり柱を補強して壁をしっかりつけて地震に耐えられるようにするというように普通の耐震補強では考えるのですけれども、須磨さんはアメリカのコロンビアというところで勉強していたので、かなり考え方が独創的で、強い箱を入れておけば、たとえ木造が崩れてきたとしても支えてあげられる、そういう建物も一つの空き家改修の方法ではないかという提案をしてくれました。

すごく良いですね。これはガラスになっていて、奥の土壁が朽ちていく様子などが見えたりして。でも、しっかりとガラスで気密性も保たれていて、エアコンもしっかり効く。働く環境としては非常に良い設計の提案をしています。

このような感じで先ほどの小屋オフィス、納屋オフィスというのが、Sansanのオフィスがここにある、ブルーベアオフィスがあって、その近くに神山温泉があったりするのですけれども、あと、えんがわオフィスと寄井座がある。このあたりです。あと、サテライトオフィスコンプレックスとWEEK神山があるあたり。このような感じで、今、4カ所ぐらい神山で盛り上がっているスポットがあるという状況になっています。

このような感じで活動していくと、いろいろな影響が世の中に出始めてきました。

2011年の寄井座のワークショップに参加してくれていた学生達のうちのオレンジのつなぎを着ている男の子が徳島出身だったのです。彼がお母さんから、神山町でパン屋さんをやりたい人がいるから、あなた、空き家改修をやってみないかという感じで話をもらったそうです。それで、先生もやっていたし、友達を集めてやれば何とかなるのではないかと考えて、やってみてくれたらしいです。実際、きれいに改修ができています。

本当に、今、若い建築学生達は空き家再生がブームみたいなのです。昨日も京都で教え始めて、好きなことはありますかと聞いたら、私は最近京都の町家を見つけたのでそこを改修しますという子がいたり。

なかなか、私達が勉強しているときは建築を造るのは非常にハードルが高かったのです。しかし、今は、学生のうちでも自分達が汗を流せば自分達の作品を造れる、そういう感じになってきているので、ぜひ、空き家がある人は、もし建築学生が近くにいたりしたら、相談してみると良いのではないかと思います。

また、徳島県も変わりました。お隣の香川県などは「うどん県」というキャッチフレーズを考えていますけれども、徳島の共通コンセプトは「VS東京」です。徳島は他の県では

なくて東京と戦っていくのだというような宣言です。それを舛添知事に言ったら笑われたらしいですけど・・・。

これはどういうことかという、東京的な価値観ではなくて、もっと神山的な価値観を世の中に訴えていけないかというのがあります。例えば「家賃2万円。改装自由。インターネット完備。つまり、何でも、できるでよ。」、これはブルーベアオフィスみたいところです。山の中でも「ここ、Wi-Fi飛んどるでよ」、こういった価値観。あとは、人が少なく子育てしやすく、地域で過ごした方がもっと生活しやすいよ、子育てしやすいよとか、東京にはない価値、そういったものを提案しているのです。

あと「まち・ひと・しごと創生本部」ができて、その有識者懇談会に大南さんをお呼びいただいたりと、神山町が地方創生のロールモデルのようになっています。

この写真はすごく衝撃的ですが、えんがわオフィスの縁側に、大南さん、徳島県知事の飯泉嘉門さん、小泉進次郎さん、えんがわオフィスの会長の隅田さん、あと神山町長が並んで座っていたり、WEEK神山の現場に小泉さんが来てくれたりしています。

私達にも色々な変化がありました。「地方創生に建築ができること」という特集の専門誌ではえんがわオフィスが表紙になったり、『美術手帖』で「建てない建築家とつなぎ直す未来」というタイトルで神山を取り上げてくださって、これは大南さんと私が対談しているところです。このような感じで、建築設計の価値観みたいなものも、今、変わり始めています。

「3.11以後の建築」展にも出品しました。このような感じで、模型と、我々がよく飛行機で行って1泊して帰ってくるのですけれども、その際の滞在のロードムービーみたいなものを展示しました。実はこれが11月7日より水戸芸術館に巡回することになっています。お近くの、ぜひ、皆さん行ってみてください。

これはまだ、来年のヴェネチアビエンナーレで建築の展示をするのですけれども、その中に神山のプロジェクトを入れていただくことになりました。これはこれから寄付を募る予定です。1人1口10,000円からできるようなので、もしよかったらお願いします。お名前がヴェネチアの展覧会場に貼り出されますので、御協力いただけるとうれしいです。

今までのお話が神山での活動です。

神山で活動してきましたどのような勉強をしたかですけれども、「神山から学んだまちづくりのポイント」は、まず、「まちづくりは楽しむもの」です。大南さんにたまに、何でもまちづくりをやっているのですかと聞く人がいるらしいのですけれども、大南さんの答えはいつも決まっていて、「ゴルフとかカラオケとかやるのに理由なんて要りますか。好きだからやっているのです。」ということらしいのです。

何か義務のように思うと、とても辛いし、続かないのです。まちづくりというのはお金が儲かるものではない。でも、楽しいからやるという、そのモチベーションはとても大事だと思います。

行政に呼んでいただいているイベントなのですから、これをスライドに入れてしま

って申しわけないのですが、「自分でやる」。とにかく行政を当てにするな。多分、全国すべての行政機関がそうではないと思いますが、神山町は本当に何もしないのです。大南さん達が活動していても、何もしないのです。大南さん達が言うのは「邪魔しなければ良いから」なのです。ですから、行政を本当に当てにしていないのです。自分でやるということがとても重要だと思います。

これは逆に行政の方に参考にしていただきたいのは、行政はやはり、何か目標を立てると3カ年計画みたいなものやってみて、1年目で失敗したことに気づいても、もう予算を決めてしまっているし、計画を立てたから、続けてやらなければいけないといったことがあったりすると思うのですけれども、神山の人達は本当に「行き当たりばったり」「やったらええんちゃう」という感じでやっていて、大きな効果を上げています。

行き当たりばったりでやるのだけれども、失敗しそうになったらまた別の道を探せば良いだけなのです。ただ、本当に何となく行きたいゴールがあって、そこにたどり着くためのルートはどういう形でも良い。そういう行き当たりばったりの精神の方がうまくいっているのですね。

「行き当たりばったり」と事業計画書に書くと多分怒られるので、計画的無計画と難しい言葉で書いていただけると良いのではないかと思います。

あと「地域の人間と移住・交流者にはクッションが必要」という、これは、移住者と地域の2つの間で問題が起こることが多いと思うのですけれども、グリーンバレーの人達は両者の間に入るのが非常にうまい。

まず、大南さんは土建屋さんの社長さんだったり、他の方も何か商店をやっていたりしゃったりとかで、地域で信頼がある方達がやっているのです。そういった人達が空き家を使いたいと空き家の持ち主さんを説得してくれて、同時に、移住者にもルールをしっかりと教える。そういうクッションとなる存在があるので、うまく回っています。

次に「外の価値観に委ねる」。これは別に地域に限った話ではないですけれども、若い人に住んでもらいたいからリフォームしようかという感じでリフォームしてくれるところがあるのですけれども、そういったところは若い人には人気ではなかったです。それよりも、ぼろぼろでもいいから好きなことができるような場所を若者は求めています。

このように自分達の中でこうすれば若者が来てくれるだろうというのではなくて、若者に来てもらって、何が良いかを見てもらうという、そういう価値観に委ねてしまうというのは非常に有効なのではないか。

次に「若者の自己実現の場作り」。これは、好きなことをやらせてあげる。先ほど、神山塾生の子達が神山で自分をもう一回見つめ直して再生していく話を少ししましたが、そういったことを、上から言うのではなくて、好きにやらせてあげる。そういう場づくりをすると町は活性化します。

次に「フラットな人間関係」。これは、えんがわオフィスの会長さんが来るきっかけにもなったことですが、神山の人達は絶対に上から何か言わないのです。本当に、一緒に遊ぶ

というか、本当にフラットで、年上も年下もみんな同じ感じで話し合える、冗談も言い合える、そういう場所なので、肩の力が抜けて、一緒にいても苦でないのです。だから、そういうところのほうが若い人が来るのではないかと思います。心配していろいろお説教するような場所には寄りつかないのではないかと思います。

そういった学んだことと同時に、現実もありまして、今、日本の総住戸数が6,023万戸あります。そのうち、空き家数が820万戸、13.5%が全国平均です。先ほど茨城県の資料を見たのですけれども、それより少し上でした。14.6%でしたね。

今、8戸に1戸が空き家なのです。30年後にそれがどうなるかといいますと、空き家率が43%になってしまうのです。どういうことかということ、自分の家の両隣が空き家なのです。とても恐ろしい状況なのではないかと思います。

まとめると、2000年までは建物を建てては壊すスクラップ・アンド・ビルドの時代でした。2000年ごろから、R不動産さんやブルースタジオさんが出てきて、建物を壊さずにリノベーションしようという時代に考え方が変わってきました。2010年、山崎亮さんなどがやっていますけれども、コミュニティーデザイン。建てたら人が来る、もうそのような時代は終わりました。建物を建てることで人を呼ぶのではなくて、もっとソフトを開発していきましょう。そういう時代ですね。

ただ、人はどんどん減っています。建物を建てなくても建物が余ってしまう時代です。このため、2015年以降は、空き家を再生してまちづくりをしていく、そういう時代になるのではないかと私は思っています。

そのような中、神山で活動していたら、神山町以外のところから、同じようなことをやってほしいという依頼が来ました。それが徳島県牟岐町の出羽島という島があります。

ここ、出羽と書いて「てば」と読むのですけれども、出羽島。人口が昭和40年ごろは700人いましたが、今は70人しかいません。700人の頃に造った家が180戸残っているのですけれども、今は70人になってしまったので、3分の2が空き家なのです。このため、出羽島の空き家問題に取り組むことは日本の未来の空き家問題に取り組むことではないかと思って、今、活動しています。

牟岐港を連絡船で出て15分ぐらいで着きます。主要な産業は漁業です。車が1台も走っていないです。このため、建物を建てたり壊したりするのは非常にコストがかかる。そういう場所なので、そのまま昭和初期や明治の建物が残っているのです。とても伝統的な雰囲気がします。

私が初めて行ったのは去年のアート展のときだったのですけれども、びっくりしました。全然、他の地域と空気感が違うのです。のんびりしていて、エンジン音も聞こえない。私はここで一目ぼれしてしまいまして、ここで絶対何か活動したいという思いを持っていたら、話をくださって、今、活動をしています。

特徴的なのはミセ造りという建物で、雨戸は普通横に引くものだと思うのですけれども、これは上がしとみ戸、ぱたんと上に上がります。下がベンチになっています。閉じると雨

戸になるのですけれども、開くところといった感じのベンチになる。これをミセ造りというのですが、このような造りの民家が大きな特徴です。

これを今、重要伝統的建造物の保存地区に指定する予定です。大体、各県に2つぐらいそういう地域があるのですけれども、指定されると、町並みを直すのに国がお金を出してくれます。改修費の8割から9割、補助が出ます。出羽島の民家は1棟が、今、直すのに1,000万かかるので、持ち主が100万出せば、残り900万は出してくれる。そのように使っていこうとしています。

ただ、整備した建物を誰が何のために使うのかはまだ決まっていません。このため、ただひたすらお金が出るから改修してしまうと、博物館になってしまって、人のいない場所になってしまう。それだと困るので行政から私に仕事が来て、元木邸という建物を、連携地区に指定される前に、お手本として町がやりたいと考えている。そこの外観はもう歴史家の方が調査してくれたとおりに直すので、ソフトウェアの部分、中で何をやるのか、内観をどうするかを学生達と一緒に考えてほしいということで、今年の1月から3回、ワークショップを行いました。

このような感じで学生が漁師さんからヒアリングをしたり、地元の方と懇親会を開いて、いろいろな希望を聞き出しました。最初はとても島の方はシャイだったのですけれども、こういった学生との交流を通して、自分達に必要なものはこういうものではないかということを考え始めてくれました。

学生が、島の方の前で学生の案を発表しました。

外観はこのような感じでもとどおりに戻したのですけれども、中は、漁師さんが長靴で入っていけるような土間を広げたカフェがあります。そのまま畳に腰掛けたり、椅子に座ってカフェみたいにして使えるように、このような場所を今年度中に造ろうとしています。

あと、出羽島は牟岐港から4キロ離れているのですけれども、去年、私は4回行こうとして、2回しか行けませんでした。台風の影響で船が出ないときがあるのです。このため、出羽島を活用していくときに、こちらにも拠点が必要なのではないか、船に乗る前に拠点が要るのではないかということで、廃校になった小学校があるので、そこを拠点にして、島づくり、まちづくりのために活用していこうとしています。

こういう小学校だったのですけれども、家庭科室を改装してコミュニティーカフェみたいな場所を造りました。ただ、これは無理やり小学校の家具をそのまま使っているのですけれども、ここで使う家具が無いのです。このため、また学生達と一緒にワークショップをして、地元の大工さんなどにも協力してもらって、家具作りをしました。

これは別にリノベーションに限った話ではないのですけれども、新しく材料を買ったりもしたのですが、1人一つ、牟岐のこの場所のために家具を作りました。

鴻野祐君と一緒にやったのですけれども、彼も神山塾出身です。2011年に神山塾2期生として彼は来たのですけれども、来たころは本当に未熟で、「おじいちゃんが養蜂をやっているから俺も養蜂をやる」とか言って蜂を買ってくるのですけれども、蜂をすぐ殺してし

もうような、そんな男の子だったのですが、神山で4年間修行して、WEEK神山の家具も作ってくれているのですけれども、今は立派なデザイナーになりました。

こういうワークショップは初めてだったらしいのですけれども、学生達の指導も上手にできるし、生活力があるので料理なども全部やってくれて、世話好きで、遊びも教えてあげられる。私がちょっと東京に出張しているときに彼がみんなを海に連れていってくれてサーフィンしてくれたり、とても頼りがいのある若者に変化していました。

実は、彼は神山塾の同じ2期生の女の子と結婚しました。すぐ結婚した。

神山塾は77人今まで来ているのですけれども、そのうち4割が神山に残っているのです。10組カップルができています。一言も婚活と言っていないのですけれども、かなり婚活効果があるそうです。

今、神山でサテライトオフィスをやっていたり出羽島で活動をしていたりすると、自分もとてもうらやましくて、自分のサテライトオフィスをもちたいと思ひまして、今、私は東京の吉祥寺で仕事をしているのですが、神山ではコンプレックスを改修した設計料をもらっていないので、そのかわり自由に使えると、2つ目の拠点。出羽島にもう一個拠点を造ろうと思って、この間、民家を購入する約束をしました。京都の大学にいますので、京都にも拠点があります。ちょっと拠点が多過ぎるのではないかと思いますのですが、今、3拠点で頑張っています。

複数の拠点を持って、1人で幾つもの拠点を使いこなす。今まで一家に一つ家があれば良かったのですけれども、そうではなくて1人で幾つもの建物を使いこなすことも空き家問題の解決の一つなのではないかと思ひて、それを実践しようとしています。

船着き場がここにあるのですが、駅近ならぬ船近ではないですが、かなり歩くと、この洲鼻というエリアは空き家が増えていて、ここに今、ワークショップを始めて、今、6組ぐらい移住したいという人が出てきているのですけれども、このあたりを移住者が空き家を手に入れて直して住んでいくエリアにしようとしています。

そのうちの一つの島田家。島田さんという方から譲っていただいたものです。これが実は土地建物合計で50万円で譲ってもらえるのです。かなり安い。家が50万円というのはどういうことなのだろう。場所によっては家を解体するのに200万円かかるらしいので、解体費200万払うぐらいだったら50万円で人にあげたほうが良いということで、土地建物と50万がついてもらえるみたいな物件もあるらしいのですけれども、それは今回、私はやりませんでした。とにかく田舎の建物は安いです。例えば古民家を直すのが趣味みたいな人が買って楽しむみたいな、趣味にも使えるのではないかと思ひてもいます。

中はこのような感じです。雨漏りがかなりひどいので、これは徳島県から補助をいただいている部分もあるので、そこで300万円改修費に使ひまして雨漏りと水回りを直して、このような感じです。出羽島は何か理由がないと来にくいのです。でも、何か興味があるととても良いと思ひるので、そういった方のお試し移住の場所として貸し出す。あとは、アーティスト、クリエイターの作業する場所として貸し出すようなことができるのではないか

なと思っています。

これがもしかしたらサテライトオフィスに発展するかもしれないし、何か別の旅館などに発展するかもしれない。そうなったらまた誰かに譲るなり貸すなりしていこうかと思っています。

このため、最初ブルーベアで、クリエイターの短期滞在施設として造ったものがサテライトオフィスを生んだように、まず出羽島での初めの一步なので、特に用途は決めず、何にでも使えるようにして始めてみようかと思っています。

ただ、ここはインターネットが無いので、家族で過ごせる場所というのが良いのではないかな。家族で過ごしながら仕事ができる、そのような場所になれば良いと思っています。

神山、牟岐で仕事をしてきて、今、徳島市でも仕事をさせていただいています。

普通ツーバイフォーはアメリカの素材を使うのですが、これはそうではなくて徳島県産の杉を使って倉庫を造ってみようというようなプロジェクトを、地域の林業家の方、木材屋さんと協力してやっているプロジェクトです。これだけ細かく小屋組が入るのを見たことがないのですが、このようなプロジェクトです。

あと、那賀町という場所がかなり山奥の方にあるのですが、ここは林業の町です。那賀町で今、きこりを育成しようとしているのです。今は90人しかいないのですが、それを250人に増やしたい。そのための研修施設を造ってほしい、神山のコンプレックスみたいな場所を那賀町にも欲しいというので、新築で設計させていただいています。

また、いまだに、行政の方は地域で箱物をつくれれば人が来ると思っている方が非常に多いです。建物を造るときに、自分のお金でなくて税金なので、余りどうなるかを考えていないのではないかなというのを、打ち合わせをして感じる時があったりします。那賀町がそうだとは言わないですが、全国で、特に田舎に行くとそういう方が多いような気がするのです。

そういうときに、建築家として、これまで色々な地域に何か求められていたものは、彫刻作品みたいなものを建築家が造るということが求められていたと思います。

しかし、最近、神山で仕事をさせていただいて古民家や伝統的な建物に触れていく中で、自分のデザイン力みたいなものを建物に落とし込んでそれを人に見てもらおうようなものは余り面白くないと思い始めていまして、それよりも、現代における民家みたいなものを提案していけることのほうが良いのではないかなと思うようになってきています。

神山では私達は、水道や電気のように、人が来るからそのためのインフラを整えるという感覚で建物をデザインさせてもらっているのですが、最近では、先ほどの倉庫もそうですし、那賀町でもそうですけれども、インフラを整えるというような感覚で建物を設計しています。現代の民家を造るという感覚でやっています。

ここでの提案は、那賀町は林業の町なのですが、大空間をつくろうとすると大きな梁の材料が必要になってくるのですが、それは通常、集成材で作ります。木を張り合わせて作るのですが、それを作するために那賀町で木を切るのですが、集成材に

加工できる場所が岡山にあるので、わざわざトラックで岡山まで持っていかなければいけないのです。そこで集成材に加工して、また持って帰ってくる。とても無駄な、ウッドマイルというのですけれども、木を運ぶ手間がかかってしまう。

そうではなくて、もっと地域でできる方法を考えようということで、今、実験的にですが、この大ばりの部分だけ、集成材に頼らずに地域の中だけで加工できるようなほりを提案しているところです。

最初は神山町から始まったプロジェクトも、今、牟岐町、那賀町、徳島市などで仕事をさせていただけるようになっています。

これは最後のスライドですけれども、一緒に家具作りをやった中島さんという女性です。彼女は30歳ぐらいで、今、東京学芸大、先生になる学校で美術を勉強しています。

彼女は今、大学院生ですけれども、学部を出てから事務機器メーカーさんに進んだそうです。そこでプラスチックの事務用の椅子を、会議やこういう場所で使うような椅子を販売していたそうですけれども、プラスチックの椅子は、新品のときは良いのですが、傷ついてくるとだんだん汚くなってきて、捨てられるのです。古くなることが良くない、新品の一番良い状態で商品売って、だんだん悪くなくなっていくものを売るというのはどうなのだろうと、とても疑問に思って自分の道を変更したそうです。

そこでとても良いなと思ったのが、新しいことへの価値観になるのではなくて、時間を経ることが価値になる、そういう建物だったり町だったり、そういったものを造っていくことがこれからの時代に必要とされているのではないかというので、空き家はぼろぼろのものですけれども、逆に、そのぼろぼろの価値だったり、色々な歴史を持っているから民家のほうが楽しかったりする。新築だから良いのだ、新しいのだという時代ではもうなくなっているのかと思います。

これは彼女が出羽島の形をしたスツールを提案してくれたのですが、一本もビスを使っていないのです。壊れても誰かが直せるような、そういう優しい気持ちで作ってくれて、これは地域の方に大流行です。

このような形で空き家再生まちづくりというのをやっていて、今後も徳島県だけでなく、今も香川県の丸亀、この間は長崎に行ってきました。色々な地域で空き家再生、空き家問題が起きていて、でも、その空き家を活用していけば町はどんどん良くなっていく、そのように思っているので、ぜひ、皆さん、空き家をお持ちの方はその活用を考えてみたり、場所を探している人は空き家に目を向けてみる、そういうのも良いのではないかと思います。

そろそろ時間だと思います。どうも御清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 坂東様、どうもありがとうございました。

以上で基調講演を終了いたします。皆様、いま一度、盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

ありがとうございました。

それでは、ここで一旦休憩とさせていただきますたく存じます。

2時55分から再開させていただきますので、よろしくお願いいたします。

(休 憩)

○司会 これよりパネルディスカッションを始めます。

初めに、パネリストの皆様を御紹介いたします。

一般社団法人文京区勤労者共済会事務局長、三縄毅様。(拍手)

笠間の魅力発信隊代表、大坪桂様。(拍手)

浪江町復興支援員、石田貴博様。(拍手)

コメンテーターは、坂東幸輔建築設計事務所主宰、坂東幸輔様です。(拍手)

コーディネーターは、特定非営利活動法人茨城NP0センター・コモنز理事、江崎礼子様です。(拍手)

以後の進行につきましては、江崎様にお願いいたしたいと思います。それでは、江崎様、よろしくお願いいたします。

○江崎氏 改めまして、茨城NP0センター・コモنزの江崎と申します。

本日はたくさんの方にお越しいただきまして、本当に、ここ数年来最大級のイベントになったのではないかと、大変うれしく思います。ありがとうございます。

後ろのほうの方、もし聞こえにくかったら合図していただければと思います。皆さんとこれからパネルディスカッションに入りますので、せっかくのお話ですので、聞き取りにくかったらおっしゃってください。

最初に、今、司会の細谷さんからもお話しいただきましたが、本日、このコーディネーターは横田が務める予定だったのですが、先日の大雨で常総地域が被災しまして、実はコモنزの常総事務所というのがございまして、こちらの方も1階は浸水いたしました。そして、横田の自宅が常総事務所のすぐ近くでございまして、自宅の方は床下浸水、隣にある奥様の御実家は1階も水が入ったということで、ずっと避難生活をしている状況で、今はそこで災害復興センターを立ち上げまして活動しているものですから、本日は現場を離れられないということで、今日は急遽替わりを務めさせていただくことになりましたのでよろしくお願いいたします。

こちらの「たすけあいセンターJUNTOS」というのを常総事務所に緊急に立ち上げまして、水が入った1階の方はまだ事務仕事はできないのですが、2階の方で今、活動を行っています。片づけの泥かきとか、東日本大震災のときの津波の映像を皆さん記憶に残っていらっしゃると思うのですが、本当に同じぐらいの規模で、被災された地域、広さはそれほどはないのですが、決壊した地域は本当にひどい状況で、まだまだ避難所にたくさんの方がいらっしゃるという状況だそうです。

こちらのチラシが入っております。フェイスブックやインターネットでも毎日のように

情報を更新していますので、こちらの方もぜひご覧いただきまして、裏に御寄附の御案内もございますので、同じ茨城ですので御支援いただけたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

今日は代理を務めさせていただきますのでよろしくお願いします。

最初に私の自己紹介をさせていただきますが、茨城NPOセンター・コモンズでは理事をしておりますが、株式会社ソノリテというNPO活動を支援する会社も経営しております。東京が本社で、先ほど坂東さんがお話しくださいました神山町にサテライトオフィスを構えまして、NPOを作りたい、認定をとりたい、寄附を集めたいといった方達の御支援をしているのですけれども、神山町の方ではコールセンターをしています。事務代行サービスということで、ここでNPOの電話を直接神山のスタッフがとったり、あとはデータベースの入力、領収証の発送作業などをやっています。

考えてみれば、コールセンターを地方に移すという話は皆さん聞いたことがあると思うのですが、東京でやる必要のない仕事というのは結構ありまして、余りタイムラグはなく、ちょうどこのブルーベアオフィスの目の前が郵便局でして、毎日のように領収証や色々な資料の発送、他には会員さんの申し込みの管理やそういった作業をやらせていただいています。

小さい規模ですから、大手コールセンターとはちょっと違います。指紋認証などのセキュリティで入るといったそういったコールセンターではなくて、小さい規模でもNPOの寄附集めなどをこちらのほうでやらせていただいています。

これは、うちのオフィスから見た裏の景色です。神山の方は、先ほど坂東さんから御紹介くださいました本当に山の中にあります。

これが上角商店街というところです。昭和40年代は皆ここが商店だったのですが、今はほとんどがシャッター通り。

オフィスの前にいますけれども、ここにサテライトオフィス発祥の地という看板を坂東さんが作ってくれるということになっています。

このような御縁もありまして、今日はコーディネーターを務めさせていただきます。

それでは、茨城県の空き家に関する状況を最初にちょっと御紹介だけさせていただきます。

皆様の資料の中に常陽産業研究所の、右上に「PLUS」と書いてあります『『空き家』資源化施策の可能性調査』というもの、こちらは常陽産業研究所がまとめてくださいました。

先ほど坂東さんも触れてくださっていましたが、全国平均が13.5%に対して、茨城県の空き家率は14.6%。少し上回っているということです。県内のどこが多いのかというのはその資料に載っていますので、こちらを参考までに押さえていただければと思います。

今日は「茨城の空き家などの地域資源を活用した共助社会づくり」というテーマでお話ししていくのですが、今回は茨城に限らず、まず、東京の文京区で活動していらっしゃる三縄さん、それから茨城県の笠間に移住してこられた大坪さん、福島から被災をされて県

内のほうに移住してこられた石田さん、この3名からそれぞれの現在の活動について御紹介いただきながら、後ほど、皆さんで、坂東さんを含めましてお話をしていきたいと思います。

では、最初に、三縄さんからよろしくお願いいたします。

○三縄氏 よろしくお願ひいたします。座ったままで失礼いたします。

文京区から来ました。私は、文京区の駒込地域活動センターの所長として駒込地区の町会などの協力・支援を主な仕事としています。3年前に定年退職をして、公務員なので再任用としてこの駒込地域活動センターに3年間おりました。今は区の外郭団体の一般社団法人文京区勤労者共済会で、区内の中小企業の福利厚生をやっているセクションの事務局長を務めています。あと2年たちましたら完全退職になりますのでこれからご紹介する「こまじいのうち」のような居場所づくりの関係のNPOを立ち上げて活動したいと思っています。

文京区は、人口が約21万人、11.29平方メートル。23区の中で大きい方から見て20番目。東西南北4キロ四方です。自転車で移動するのが一番早いです。文京区の家は、礫川、大原、大塚、音羽、湯島、向丘、駒込、根津、汐見と9地域にわかれ、私がいたところは駒込の地域活動センターです。

「みんなの居場所 こまじいのうち」は駒込地区にあります。六義園など名勝があるところなんです。こまじいのうちを立ち上げたきっかけは駒込地区の神明西部町会の副会長さんから、空き家があるのだけれど地域のために使って欲しいという申し出がありました。空き家再生というよりはコミュニティーの再生、要するに地域人たちの顔が見えない、一人暮らしの高齢者の地域での状況がわからないところに視点を置いて、この空き家をコミュニティー再生のために活用できればと思いました。

サポート体制としては、駒込地域活動センター所長としての支援。運営は駒込地区町会連合会との連携や東京都の助成金を使って始めました。このほか、私が定年を迎えて再任用として活動センターに着任したときに、文京区社会福祉協議会が地域福祉コーディネーターの職員を初めてテストケースで駒込地域に配置しました。この地域福祉コーディネーターと力を合わせ両輪でやっていこうということで始めたのがきっかけです。

「こまじいのうち」の運営には実行委員会形式をとりました。多くの地域の人に声をかける。要するに民生委員さんや「話し合い員さん」、青少年委員、色々な活動をやっているグループ、東洋大学も近いので東洋大学の学生、駒込の地域で活動している主な人に声をかけて実行委員会を立ち上げました。当初、40人ぐらい集まって始めました。

そのときに、名称をどうするかとか、利用料を取るか取らないとか、そういったものを検討しました。名称は、駒込の町会長は大体80歳前後で、12町会の町会長で一番若い人でも70歳ぐらいで、町会の高齢化というのはどこの地域でも一緒だと思うのですけれども、駒込町会長の顔を見て、「じいさんの家」だねと。そういうようなことで「こまじいのうち」に決まった次第です。

これが組織図です。運営委員が、やはり町会の理解がないと地域での活動はうまくいきません。文京区は保守的なところなので、そういった意味では町会長をうまく巻き込んでこちらの土俵に引き入れるということが大事だと思っています。後は、実行委員、カフェこまのスタッフ、プログラム担当とか、運営のコアメンバーを組織化しました。

これが日々の様子です。カフェこまというのは、誰もがぶらりと来てお茶を飲んで、利用料は100円ですけれども、資料にあります、1周年のときに作った冊子9月のプログラムです。

大学生の落語もやっていますし、脳トレマージャン教室。これなども、4畳半と6畳と台所しかない狭い場所なのです。けれども、台所まで卓を出して5卓ぐらい準備して、時間前高齢者の方が玄関に並んでマージャンをやるような状況が出てきています。

アクセサリーづくり、布ぞうりづくり。これは、地域の人が、私はこういうスキルを持っているのでこまじいでやってみたいなど申し出があります。この常設のこまじいのうちを開いたおかげで、地域の情報がこまじいのうちに集まるようになりました。例えば、私は外国人記者クラブで料理長をしていたという70歳の高齢者の方。地域での人材が結構、名乗りを上げてきます。行政が旗振りをして人材バンクを作りましょうと社会教育課などで募るのですけれども、それはなかなか集らないのが現状です。また、そうした人材を集めても次に展開するようなスキルが弱く行政としてなかなかうまく事業展開できない。そうした意味では新たな発見だと思います。

こまじいバザーは、近所の人がたくさんの品物を持ってきてもらって、1回やると9万とか10万円の売り上げがあります。

これは、日々のプログラムのゆる育カフェ、すけっと隊。すけっと隊というのは、高齢者が電球の球を替えたいとか草むしりとか水やりとか、そういったものにすけっと隊として派遣をしています。一回行きますと300円から500円程度をもらうのですけれども、こういった活動も始めました。

囲碁カフェ。それからハロウィンも去年やったら350人ぐらいが集まりました。これも地域のこまじいの家を中心とした呼び込みがあって行事をやりました。

利用料も緩く、玄関のところに100円を入れてもらうだけなのです。あとは名前。名前も書きたくなければいいのですが、高齢者など事故があると困りますのでとにかく住所と名前を書いてもらっています。

「運営を担うコアメンバー」ですけれども、マスターというのですが、秋元さんという方がこの空き家を提供して下さっています。私が事務局長。ボランティアコーディネーター、マネジャー、会計、広報、東洋大学学生や東大の学生も参加しています、ほとんど無償でこの会を運営しています。

「こまじいのうち」の資金ですけれども、各町会から年間1万円をもらって12町会で12万円。あと、これは東京都だけなのですけれども、町会に対する直接補助があって、これが50～100万円あります。利用料が100～300円。会場も、カフェこま以外使う場合、夜間使

う場合には場所代として1,000円。バザーの売り上げが9万円くらいが主な運営資金です。

また、こまじいの運営で非常に大きいのが「町会の力」です。このこまじいのプログラムは、毎月400枚、12町会に町会長の協力を得て配っています。130の掲示板が町会にはあるので、掲示板にも貼ってもらっています。

次に「実績と効果」です。今回、年間4,500人ぐらい。私が利用者と私がボランティアボランティアといった感じではなくボーダレスの関係か参加する人にとって居心地の良い結果になっています。地域では素晴らしいスキルを持った方が多くそのスキルを地域で生かしたいという方も出てきました。それから、子育て中の若いお母さん方の新たなサロンが立ち上がるなど、こまじいのうちを通じて、地域の問題、参加者の色々な悩み事、ごみ屋敷の情報、そういったものが入ってくるようになりました。

これは統計をとったのですけれども色々なプログラムもやっているのですけれども、やはり「カフェこま」。近所の人がぶらっと来てお茶を飲んで帰っていく、参加者一番多いのがこの「カフェこま」です。脳トレ麻雀や囲碁カフェは何かいろいろな行事をやったほうがひとが来るだろうということで始めました。しかし、地元の町会長などは、プログラムを増やしていくことよりやはりぶらっと来て、お年寄りから赤ちゃんを連れのお母さん方がお茶を飲んで帰ってもらうのが一番良いのではないかという思いがあります。

「こまじいのうち」のマスター、これは秋元さんですけれども、神明西部町会の副会長です。子の短冊は子供の名前です。子供の名前が覚えられないというので、新しい子供が来ると書いてもらっているのです。この短冊が、100人ぐらいになっているのです。そのぐらい、お母さんと子供たちも来る家です。

これは「こまじいのうち」様子です。

これは飲み会。行政の施設だと、飲食はだめよとか酒はだめよということがあるのですが、民家で駒込の町会連合会が主催しているので飲食は自由です。「こまじいのうち」には台所もあるので、子供づれお母さん方はお昼御飯にカレーなどを作って食べて、きれいに片づけてもらって帰ってもらうというようなことも自由にやっています。

次に、文京区社会福祉協議会の「地域福祉コーディネーターの役割」です。今、文京区の駒込で1人配置されています。行政になじまない地域住民の困りごと、トラブル、ごみ屋敷問題など課題解決を福祉コーディネーターがやっています。事例により初期段階で福祉コーディネーター対応し、そこで対処できないものを行政に繋いだり様々な機関につないだりする役割もしています。

これは「立ち上げ時のサポート」ですけれども、こういった形で作成をして、意識合わせをして、立ち上がり支援を行っています。現在、文京区に空き家を使った3つ目の居場所ができるようになりました。余談ですけれども、ある地域でおばあちゃんがひとり暮らしでごみ屋敷だった。多分1人で住んでいると近所の人と思っていたのだけれども、亡くなったら、そこに群がる色々な相続関係者が来たことという話があります。文京区は土地も高く資産価値も高いので空き屋の転用は難しい状況があります。

地域に空き家があるといっても、地方の空き家と状況は違うのではないかと思います。それでも私の家を使ってください、私の家を使って何かやってくださいというこという申し入れがあり、今は3軒目の空き家の利用も立ち上がっています。

現在のサポートとしては、プログラムを始めたいという場合のプログラムの立ち上げ相談。人が来ない場合のプログラムの内容についての相談。活動費用。こういったもののアドバイスをしています。

「こまじいのうちの効果」としては、参加者と支援者に壁がない。独居の高齢者や精神疾患があり社会的に孤立していた人との繋がりもできつつある。それに対しての支援。世代を超えた交流の場になっています。こういった形でコミュニティーの再生を目的として、私たちは2年前の10月1日にオープンしました。2年半年で、毎年4,500人ぐらいの来場者が来るというのは大変な驚きです。最初はだめだったらやめてしまおうということで始めましたが、ここまで来たら中々やめられない。秋元さんがオーナーであり、秋元さんによる功績も大きく今後、持続可能な運営していくにはどうしたら良いのかが今後の課題となっています。

以上です。(拍手)

○江崎氏 三縄さん、ありがとうございました。

空き家がきっかけになって地域の居場所ができた、そしてますますこれから数が増えようとしているというお話だったかと思うのですけれども、坂東さん、いかがでしたか。

○坂東氏 いろいろ地域で講演させていただいたときにお話しいただくのは、学生さんを連れて何かやってくださいみたいなことを言ってくださる方がいるのですけれども、ではあなたが自分で何かやったら良いのではないですかと思うときがあるのです。

ただ、今のお話を聞いていると、やりたいことはたくさんある、やることはいっぱいあるような感じのエネルギーが強く伝わってきて、後で色々とそのことを解き明かしていきたいと思っているのですが、ちょっと下世話な質問をさせていただいても良いですか。

秋元さんは東京で不動産を持っていたら、あそこだと大体ひと月15万円とか20万円ぐらいで貸せると思うのです。そうしたら毎月1回海外旅行ぐらい行けるではないですか。モチベーションは何なのですか。

○三縄氏 最初は、区の行政、私（地域活動センター所長）や社会福祉協議会の職員がやってくれるならまあ貸しても良いという話だったのです。1階が6畳と4畳半台所。お話にあったような欲のない人で、「こまじいのうち」を始めたらはまってしまいました。年寄りと話しているよりお母さん方と話している方が楽しいと秋元さんも言っています。今、秋元さんは神明西部町会の副会長なのですが、今の町会長が次の町会長を秋元さんに譲りたいと言っているのだけれども、自分は「こまじいのうち」があるから嫌だと言ってもめています。賃料は家賃相当として、光熱費分だけで良いと言うので、月3万円しか払っていません。

また、社会貢献も、最初はそのつもりではなかったのだけれども、地域のことに強く関

心も持ち出したし、自らごみ屋敷などに行って片づけたりするのです。そういう意味では社会貢献に目覚めて、自分は生きている間は「こまじいのうち」やってもいいというようなことなのだと思います。

今度、東大の学生さんで建築専門の人がいて、2階をリノベーションして貸そうという話があります。5万でも10万でも資金ができれば、それをまた元手に何かできるのではないかなというような構想も持ち上がっています。秋元さんにはかなり自由にやらせてもらっていて、大変感謝をしています。

○坂東氏 どうもありがとうございました。

やはり社会貢献というのが一つのキーワードになると思います。

○江崎氏 ありがとうございます。

続きまして、大坪さんから、笠間に移住してから現在取り組んでおられる活動について御紹介いただきたいと思います。お願いします。

○大坪氏 こんにちは。大坪と申します。

それでは、最初に自己紹介をさせていただきます。

私は今年3月まで千葉県浦安市の公立中学校で教員をやっておりました。34年間の教員生活で、最後の5年間は校長をやらせていただいて、今年3月に定年退職しまして、4月から笠間に住んでおります。

私が笠間に住むようになったいきさつは、もともと田舎の生まれなので、岐阜の郡上というところ大変な山奥出身の人間なので、定年後は山の近い緑のあるところで、いわゆる人生の楽園というものです。そういうところに住みたいなと思っていました。

ただ、岐阜は遠過ぎるので、家内と一緒に10年ぐらい前から、関東一円のどの辺が良いかなということいろいろ探しました。山梨県も行きました。東京のあきる野とか。溪流釣りが趣味なものですから、できればそういうところへ行きたいなというものもあったのです。

そして、数年前に笠間に会って、ここが良いなということで笠間に決めました。

笠間に私が引かれた理由は、まず何ととっても、茨城県はどこでもそうだと思うのですが、とても、ほど良い距離なのです。遠過ぎない、それで近過ぎない距離。最初の5年間ぐらいは私は2地域居住みたいない感じで考えていまして、週末に行けるような距離でいうとちょうど良かったということです。

それから、アクセスが良い。最初に山梨県とかいろいろ考えたのですが、一つは首都高を越えていくのがとても大変なのです。帰ってくるのも大変です。笠間ですと首都高を越えなくても良い。それから、常磐道が割と渋滞しない。

もう一つ、うちの家内が30年来のペーパードライバーでして、電車でも来られると良いなというのがありまして、笠間は、私は船橋に住んでいるのですけれども、そこから武蔵野線、常磐線を乗り継いで2時間ぐらいで来られるということで、非常に地理的に良いところにあるのではないかと。笠間に限らず、茨城は全体的にそうではないかと思っていい

ます。

2つ目が、これは私の住んでいるすぐそばのやきもの通りの風景ですけれども、こういう風景のある町というのはなかなかない。芸術の香りがする、しかもひなびた感じの町並みというのがとても良いなと思いました。

それから、やはり豊かな自然ということで、左側の写真は私の家のすぐそばですけれども、大体春先から8月いっぱいぐらいまでずっとウグイスが鳴いているのです。地元の人に言わせると何だそんなことかと言われますけれども、ウグイスが鳴いていたり夕方にはヒグラシが鳴いたりというのは本当に癒やされるなと感じております。

これはどちらかというと笠間に来てから強く感じているのですけれども、まちづくりの意欲や人の魅力を強く感じる場所だなと考えています。笠間にもともといらっしゃる起業家の皆さんや、あるいは社会貢献活動をされている方がたくさんいらっしゃって、そういう人達のとても熱い思いや、あるいは外から入ってきている人もとてもたくさんいるのです。芸術家をはじめとして、色々な形で色々な人生経験を積んだ人が外から入ってきて、その効果と言いますか、そういう人の魅力も一つありました。

ただの田舎ではないと言ったらちょっと叱られますけれども、そういう、何か違う魅力があると感じていまして、笠間に参りました。

5年ぐらい前から小さい家を建てて週末に通っていたのですけれども、今年の4月からいよいよ笠間に本格的に住むという前に、昨年8月に笠間市の主催で「コミュニティビジネス講座」というのがありました。私は第2の人生を考えたときに、ただ田舎でぼーとしているのではなくて、やはり地域の人への何かの役に立って、地域の人と何かやって一緒に楽しくお酒が飲めるというのが理想だったものですから、何かやりたいと思っていましたので、これは良い機会だからと思って参加させていただきました。

ここに参加したことがその後の非常に大きな財産になったと思っています。ここには、地域で実際に地域貢献活動をやっている方、NP0の代表の方や地域興し協力隊の方などの意欲がある人がたくさん集まっていまして、そこで出会ったのは本当に良かったと思っています。

その中で、最後に、あなたは何ができますかというプレゼンのときがあったのですけれども、そのときに私が一番やりたかったのは、先ほど坂東さんからありました空き家活用をやりたいというのが一番ありました。私の大好きなやきもの通りの、虫食いのように点々と陶芸家さんがいたであろうところが空き家になっているのですね。そこを何とかしたいと思っていたのですけれども、不動産屋さんや色々な人に相談したのですけれども、それは難しいぞと言われました。これはすぐ手はつかないなと思いついて、私のキャリアを生かせる中高生の学校相手の体験型教育旅行が、笠間に無かったので、やってみようということで考えました。

そして、4月の『広報かさま』に、助成金があるので、応募してくださいというのがありまして、応募するには団体でなければいけないということで、泥縄式で、とにかく知って

いる人に片っ端から声をかけて、「笠間の魅力発信隊」というのを本当にばたばたで立ち上げて、団体として助成金に手を挙げまして、何とか無事通していただくことができました。

笠間の魅力発信隊の目指すものは、その魅力を発信するということと同時に、都会にはない豊かな生き方というのがあると思うのですけれども、それを発信して、ゆくゆくは地方から都市への人の流れを反転させたいというすごい野望です。

豊かな生き方といいますと、私は笠間に来て食生活がとても豊かになったのです。しかも食費が大変安くもなりました。近所の人ができる野菜をどんどん持ってきてくれるということもあるのですけれども、その季節に合ったものを食べるようになりました。スーパーですと一年中季節がわからないのですけれども、こういうところへ来ると、クリのおいしい季節にはクリ、タケノコのおいしい季節にはタケノコということで、料理のレパートリーも増えますし、こういうことが本当の豊かさなのではないかというのを感じております。

最初に取り組む事業として「笠間ふれあい教育旅行」というのを企画しております。これは日本全国色々なところでやっているのですけれども、私も中学校の教員という立場でたくさんのところで子供達に経験してもらって、子供達が普通の観光旅行よりずっと喜ぶのです。本当に貴重な出会いや経験があって良かったので、これをやろうと思っています。

これは教育旅行の意義ということで、受け入れた方にもやりがいや生きがいを感じてもらったり、自分のやってきたことを次の世代に受け継いでもらったりという意味があります。

それから、子供達を通して笠間に繋がる人を増やすことに繋がれば良いと思っております。副収入にも繋がるということです。

こういう子供達の触れ合いができれば良いなということでやっています。

子供達にとっても、特に都会の子供達は本当に生活範囲が狭くて、親と先生以外の大人に会うという機会は非常に少ないということで、非常に子供達にとっても大きな力を身につけてもらう機会になると思っています。

今、こういうチラシを作って、受け入れてくださる民家を募集する活動をしております。今年中に50戸ぐらいを確保して、来年の6月に最初の受け入れをやろうと思っているのですけれども、これを持っていろいろな民家に伺っています。

これは陶芸家さんをお願いしているところです。

協力してくださる方が徐々に増えていまして、30軒以上確保する状況になってきました。

ただ、その中で、笠間の課題にもなるのですけれども、気になることが幾つか出ています。

一つは、体験旅行の受け入れをお願いに行くと、陶芸家さんはすごく積極的に受け入れてくださる方が多いです。ただ、農家は増えなくて非常に困っています。

なぜ農家が増えないのかといいますと、一つは圧倒的に兼業農家が多いのです。御主人も奥さんも働きに出ているから平日はできないというところが多いです。

もう一つは、専業農家でも高齢化が進んでいて、後継者がいない。この間、非常にショックを受けたのは、あるリンゴ園さんに伺ってお願いしたら、かなり高齢なおじいちゃんだったのですけれども、ちょっと体調が悪いから、今年いっぱいでもうリンゴの木を切ってしまうと思っているというお話をいただきまして、もったいないなと思いました。こういうのをやるという若者が、都会を探したら何人かいるのではないかなという気がしまして、何かそういうことが繋がっていかないかなと感じています。

もう一つは、やはり先ほど来出ています空き家や空き店舗が非常に多くて、つい先日も、笠間の象徴のような伝統あるお店が今年いっぱいでお店をやめるという情報も聞きました。これを本当に何とかしなかったら笠間の魅力はどんどん無くなってしまうという気がしております。

ただ、希望は、先ほども言いましたけれども、地元の熱い人や志ある若者が増えていきます。私の会にも、今、全体で20人、魅力発信隊の会員がいるのですけれども、20代の若い子が4人ぐらい入ってくれています。そういう人がかなり今、増えている感じがしていますので、そういう人。それから、私のような外から入ってきている人もたくさんいますので、そういう人達がうまくコラボすれば何かの力になるのではないかと、そういうことに希望を持ちながら今後とも活動をしていきたいと思っております。

以上です。ありがとうございました。(拍手)

○江崎氏 大坪さん、ありがとうございました。

移住ということで千葉県からお引っ越しをされてきて、割と短い期間で笠間の魅力発信隊という活動を立ち上げられて、どんどんやっていらっしゃるのかという感じがしましたが、坂東さん、いかがでしたでしょうか。

○坂東氏 若い人との繋がりががあるという意味で、教育をやっていらっしゃった、校長先生をやっていらっしゃったというのは大きな強みになっているのではないかと思います。それでこういう企画をやられていて、ちょっと具体的なことを聞きたいのですが、「ふれあい教育旅行」を行うときの、今は民家を募集していらっしゃるというのを言っていましたけれども、これまではどういう施設や拠点をを使って旅行を運営されているのですか。

○大坪氏 まだ旅行は全くやっていなくて、今年1年目で受け入れ民家を確保して、来年の6月に、一応予定では私のいた浦安市のあたりの学校に来てもらおうと思っているのですけれども、モニタリングツアーをやって、そこでいろいろ反省点を出しながら、3年目から本格的に受け入れるという方向で考えております。

○坂東氏 どうもありがとうございました。

○江崎氏 ありがとうございました。中身のほうはまた後ほどお話を伺いたいと思います。

続きまして、石田さんですね。浪江町から茨城のほうに引っ越してこられました石田さんの現在の取組を御紹介いただきたいと思います。お願いします。

○石田氏 石田です。よろしくお願いします。

初めに、簡単に説明させていただきたいと思います。

浪江町復興支援員の正式名称は「浪江町役場 生活支援課 復興支援員茨城県駐在」となっています。震災後、全国10拠点に配置されまして、日本全国をカバーしています。茨城県は、26年5月から水戸市のコモンズさんのところに拠点を置かせていただき、茨城県をカバーしている状態になっています。

駐在員は、現在、浪江町出身の当事者3名で構成されていまして、茨城に避難している方々のサポート役として活動しています。

活動内容は、主に、浪江町から茨城県に避難している人達の戸別訪問をして町民と役場をつなぐ役割、さらには見守り、ケアというような活動をしています。その他に、情報発信、茨城県の良さを発信したり、現在の浪江町の状況がどのようになっているかということや伝えたりするようなこともしています。そのほか、コミュニティー支援ということで、茨城県内に浪江町の自治会をつくりたいという人達もいたので、特殊ではありますがけれども、町外にコミュニティーを作るといような活動をして、避難生活でストレスを感じている人達が少しでも良い生活ができるようにということで活動しています。

現状は、福島県から茨城県に避難している人は、把握しているだけで移住、定住者も含めまして3,500人いるという状況です。そのうち、浪江町からは1,000人強。現在でも県北を中心に少しずつではありますが増えていく状況であります。茨城県の人口700人に対して1人が福島県の人に住んでいるという感覚で見てもいいかと思います。

移住と捉えられるかどうかかわからないのですが、住民票はまだ福島県に置いたままという現状です。その背景には、家族で暮らす二重、三重生活など、資金などの不安で茨城県に定住するか福島県へ戻るかという選択がなかなかできない傾向や、また、仕事関係、世帯の中でも意見が食い違うなどして決められないという人達が大部分です。

震災から4年半経っていますけれども、まだ茨城県に来て地域に溶け込めないという状況が多く見られます。

問題点としてよく聞くのが、土地勘がない。土地勘がなくて運転が怖いというようなこともありまして、なかなか外に出られないという人もいます。

近所つき合いがない。空き家に入ったは良いが、近所までの距離が非常に遠くて、なかなかコミュニケーションがとれないという人もいました。

他には、避難生活による風評被害が結構ありまして、風評被害が自分にも降りかかるのではないかと、なかなか地域の人にアプローチすることができないという状況もあります。それに関係して新しく地域の友達ができない。

また、文化や言葉遣いが違うため、少し戸惑いを感じる。少し冷たく感じるというようなことも聞こえたりします。

他には、現在、家を購入して住んでいる中で、家を購入したからもう茨城県に定住したいのだけれども、なかなか仕事がないというような話も聞きますし、それをどこに相談して良いかわからないというのがあります。

行政との繋がり、社協等の繋がりとは簡単だけれども、地元の、隣に住んでいる人との繋

がりはちょっと難しいというようなこともあります。

この点に関する課題として挙げられるのが、既存のコミュニティーに自然に溶け込むきっかけをどうやって作っていったら良いのだろうかというのと、結構高齢者もいますので、生きがいをどうやって作っていくか。また、情報をどうやって伝えていくか、情報を得られる環境を作っていくか。それをひっくるめて、仕事、趣味、人間関係の構築というのが課題になってくると思います。

また、茨城県の良さも聞くことがありまして、冬は暖かくて夏は涼しくて温暖な気候だということと、食べ物がおいしくて太ってしまったという人もいます。東京に近いからすぐ遊びに行けるし買い物にも行けるといいますし、自然に囲まれていて快適だという人もいます。歴史、文化があって良いという人もいます。茨城県は生活するのに必要なものがそろっていてとても魅力的なところだということがよく聞かれます。

解決策として、茨城県の魅力を発信し続けて、それと並行して福島県の移住者・避難者が抱える問題を一つずつ整理・解決していくことで、これから茨城県が移住者を迎え入れる環境が少しずつできてくるのではないかと思います。

また、地域とのコミュニティーを築くために、今、挙げられた問題を解決していくと、お隣同士、ともに助け合って生活する体制は自然にできていくと考えられます。

また、自分達は故郷を失われたわけではないけれども、失われつつある人から見ると、もっと若者が茨城県の良さを発信して、もっともっと活発に活動していった欲しいと正直思います。

以上です。(拍手)

○江崎氏 石田さん、ありがとうございました。

今、御紹介いただいたのは、石田さんが浪江町の復興支援員として、茨城県内に避難といつか移住してきている福島県からの方達を一軒一軒ヒアリングして回ったりされているのですね。その中で気がついたことということで、今、まとめてお話をいただきました。

そして、石田さん御自身がまさにこの問題と向き合っているということです。そのあたりを少し御紹介いただけますか。

○石田氏 自分は今、日立市に住んでいまして、日立市に来た理由は、特に自分が来たいわけではなく、妻に強く日立市を勧められたというのもありまして日立市に来たのですが、日立市に来て良かったなと今は思っています。

私は海がとても好きで、サーフィンをするので、海の魅力にとりつかれて、今は妻よりも日立市に来て良かったと思っています。

○江崎氏 ありがとうございます。

今は日立に住んでおられる。これから先の住まいをどうしようかなということを多分考えて。

○石田氏 はい。子供がいまして、なかなか向こうにはという思いもありますので、日立市にとりあえず定住を、浪江町復興支援員という状況でお話しできることではないかもし

れないけれども、そのように考えています。

○江崎氏 ありがとうございます。

浪江からの避難ということが非常に大きな課題といいますか重たい問題をたくさん含んでいて、今、さらさらっとお話しいただきましたけれども、多分、この一つ一つ、色々な背景、思いがもっとあるのかと思って、それもじっくり聞きたいところではあるのですが、今日のテーマの方に戻りまして、「空き家などの地域資源を活用した共助社会づくり」ということでお3人の方にこれから少しお話を聞いていきたいと思っておりますけれども、坂東さん、ここをもうちょっと聞いてみたいなというところがありますか。

○坂東氏 まず、先ほどの石田さんのお話の中で、福島から来られている方、避難者の方は、皆さん空き家を活用して住まわれているような状態なのですか。

○石田氏 空き家という定義がまずどうなのかという問題もありますけれども、基本的に、現在定住を考える人は、アパートなどの方が多いですかね。全体的に何となくのイメージでいうと、3割、4割は中古物件を買ったり新築したりしているという感じです。

○坂東氏 ありがとうございます。

実は石田さんは、先月、神山に来てくださったのです。いろいろ見てくださったのですが、実際に来てみていかがでしたか。空き家の活用の様子を見てくださって。

○石田氏 空き家というより、地域の温かさがすごく伝わるなと思いました。ちょうどあの日、雨が降っていたのですけれども、暗くなって、通りを歩いていると、近所のお婆ちゃんが「雨降ってきたね」とか。そういう何気ない一言が、多分、よそから来た人にとってすごく温かく身にしみる言葉なのではないかと思いました。

他に感じたのは、色々な大きい企業、有名な企業が進出していて、そこで、全てがフラットと言いますか、そこで誰かが起業する、潰してやろうというのではなくて、昔の日本の商店街ができてきたように、パン屋がないからパン屋さんがあると便利だよねとか、そういうまちづくりをしていて、それを皆で支え合って築いていくというのを感じて、短い時間しかいなかったのですがそれが正解かどうかわからないですけれども、それがとても魅力的だなと思いました。

○坂東氏 浪江町の方達は、住んでいた場所にいられなくなって、土地の中のコミュニティみたいなのはもう無いという状況で、これから新しい土地で作っていくのか、それともまた自分達で町を造るのかというような状態であると思うのですが、大坪さんが笠間で魅力発信隊を作られたときは、まだそれほど、来られて4、5年活動されていたと思うのですが、いざ団体を作るといようなときに結構な人数の方を集められていることがすごいと思ったのですが、どのように集められましたか。

○大坪氏 発信隊のメンバーは先ほど20人と言ったのですが、それは、自治会とかそういうところよりも、先ほど言った「コミュニティビジネス講座」で知り合った仲間や、私の職場の、今は笠間市の教育委員会ではちょっと仕事をしているのですが、そういう職場の関係の方が主で、実際にこういう活動を本格的にしたのは今年からです。

もちろん私も一応町内会に入っていてまして、週末しか来ないときもきちんと一応仲間に入れてもらって、回覧板を回してもらったり、あと、月に1回とか2回ごみ拾いとかありますね。そういうのが今日はあるなと思いますとできるだけ出るようにしまして、そういう感じで何となくうまく、皆さん優しくて入れてもらったという感じです。

○坂東氏 私もこの間、出羽島でHARBORというのをやろうと徳島県から交付金をいただくときに、個人だと受けられないので団体を作ってくださいと言われたのですが、美大出身だからなのか、そういうグループを作るのがとても苦手なのです。いつも自分の好きなようにやりたいという思いがあって、団体を作るとがんじがらめになってしまうのではないかといった不安感があったりするのですが、中学校の校長先生をやめられた後で、好きなことをやりたいという思いもあったと思うのですが、もう一回そういう組織みたいなのをやっていこうと思ったのはどういうモチベーションからですか。

○大坪氏 助成金をもらうのに5人以上のメンバーで構成される団体でないとももらえないという縛りがあったので、当初、本当に6、7人に声をかけて作ったという感じです。

たくさんの民家の方に当たったりしますので、実際にこの活動をやっていくには絶対1人ではできません。また、観光協会の方や農業公社の方、役所の方にもうまく協力いただいたので何とかスタートできたのかと思っています。

○坂東氏 参加者の方達のモチベーションは、地域に空き家が増えていて、そういうのを何とかしたいと思ったのですか。

○大坪氏 それがやりたかったのよという人が結構いまして、前から笠間でこれをやりたかったのだけれどもなかなかできなかったのだと言ってくれる人が結構いました。女性のパワーをすごく感じていまして、おばさんがとても頑張ってくれて、女性は頼りになるなと感じています。

○坂東氏 大坪さんのお話の中で、人の流れを逆転するというキーワードがあったと思うのですが、それは私も講演の中で話をさせていただいた「VS東京」の考え方にもすごく通ずるなと思います。

逆に、東京で活動されている三縄さんにお聞きしたいのですが、先ほど秋元さんのモチベーションについてお聞きしましたが、今度は関わってくれている大学生、結構若い女の子が落語をしていたような写真がありましたけれども、そういう大学生は彼氏とデートしたい年ごろではないですか。おじいさんとかおばあさんがたくさんいるところに来る気持ちというのはどういうところからなのか。

○三縄氏 それは東洋大の落研ですが、そういう場所で落語をしたいという意識があるのだと思います。ほとんどボランティアなので交通費ぐらいしか出していないのですが。

あとは、東洋大のゼミで社会福祉学科などがあり、そういうところの先生が結構積極的に、地域に出るようにと働きかけています。その結果、学生と繋がりができているのだと思います。

彼女を連れてきて一緒にボランティアをやる学生もいるし、東洋大は海外の留学生を受け入れていて、近くに留学生向けの寮があって、留学生をたくさん連れてきます。そうすると、そこで交流ができて、アフリカの方をはじめとして色々な国の人が来て、そこでまた高齢者も交流をしたり、結構酒を飲んだりして国際交流までしています。

○坂東氏 私も設計事務所をやりながら地域の活動もやっているのですが、東京で、ちょっと人手が足りないからアルバイトで学生に来てくれないか、時給を払うからと言うと、全然来てくれないのです。お金を払うと言っているのにです。しかし、出羽島でまちづくりをやると言ったら、「来たい。来たい。」と言ってくれた。しかも、別に交通費を出すわけでもなくて、自費でお金を払って社会貢献をしたいという子達もとても多いです。私の東京の仕事ですと金を払うと言っているのに来ないのに、社会貢献活動ですと自分でお金を払って来るのです。

先ほど課題のようなお話もあったと思うのですけれども、だんだんそうやって関わっていくうちに、のめり込んでくる子達がいると思うのですけれども、そういう子達はどういう感じですか。

○三縄氏 やはり、地域の中で何かしてみたい。要するに、自分の住んでいるところ、例えば江戸川区に住んでいるという学生もいますが、やはり地域でのきっかけがないですね。だから、「こまじいのうち」のように居場所が継続的にあることで、そのきっかけの中でいろいろなことをしてみたいというようなことがあります。今度はこういうことをしてみたいとかああいうことをしてみたいというような提案がある。江戸川区に帰ったらどうかと言うと、そういう繋がる場所もないのだと言います。

文京区に來れば「こまじいのうち」が一つのきっかけので、何か活動してみたいというのが出てくるのだと思います。

○坂東氏 神山とも共通していますけれども、若い人がやってみたいという場を実現できる場所があると、本当に若い子が来てくれると思うのです。だから、落語をやっている彼女なども、ふだん人に聞いてもらえないけれども、ここに来ると楽しんでもらえる。

本当に若い子達が社会貢献を求めている。こういうところで話すことではないかもしれないけれども、私はアイドルが好きで、アイドルの子達にたまにインタビューすることがあるのですけれども、彼女達もやはり社会貢献したいと言うのですよ。

青山学院大を卒業した子が、もうブライダルに内定が決まっているのに、お金をもらって人を幸せにするのは何か違うと思うと言い出して、アイドルの方が私は自分の社会貢献に向いているかもしれないので内定を蹴ってしまった子がいるらしいのです。食えない道に行ったのですけれども、それでもとても生き生きとやっているというのがありました。

本当にやりたいことを実現させる場づくりのために空き家を活用するというのの一つ見えてきたと、私は今、思っています。

○江崎氏 ありがとうございます。

三者三様、神山も含めて色々な事例を伺ってきましたけれども、やはり共通しているの

が、1つ目が、お金ではないところのモチベーションと言うか価値観。それから、距離を超える、でも行きたい、やりたいみたいなどところ。そこをどのようにデザインできるかによってこのような色々な動きが生まれていくのかと、ちょっとヒントかなと思いました。

それでは、ここで会場の皆さんからも、坂東さんを含めまして御登壇の皆様に質問があればお受けしたいと思いますので、恐れ入りますが、御質問がある方はその場で手を挙げていただけますでしょうか。

○質問者 ありがとうございます。

坂東さんに質問したいのですけれども、今、神山とか、非常に過疎になっているところに若い人達が来て、またそこで結婚までされているような人達が増えている。そうすると、将来的には学校や子育てをやっていく中で町として必要になってくるのではないかと思います。のですけれども、そういう将来のビジョンはお持ちなのか、それとも先ほど言っていた無計画の計画の中で時間とともにそのときそのときで考えていこうと思われているのか、その辺をお伺いしたいと思います。

○坂東氏 とても良い質問で、きょう御紹介した中で神山バレーサテライトオフィスコンプレックスというところがあったと思うのですが、実は、今年の事業でグリーンバレーの方達が「神山メイカーズ・スクール」という名前でそこをさらに成長させようとしているのです。

そこに、3Dモデリング、カーモデリングができる寺田さんという方だったり、プログラミングができる本橋さんという方がいて、いつも、年齢的にも似ているので、3Dプリンターを使って遊んだりドローンを作ってみたりとか、靴づくりをしている子達の足形を、普通は木で削るのですけれども、それを3Dで作ってみたりといったことをいつも楽しそうにやっている子達がいます。そこに「メイカーズ・スクール」でファブラボを造ろうとしていて、レーザーカッターや3Dプリンターを入れようとしているのです。

そういう自治体は他にも多いと思うのですけれども、神山はとてもメリットがあるのは、もう、そこにデモンストレーションしてくれる人がいるのです。寺田さんが、作りたいものがあるからどんどん3Dプリンターで作っていく。その様子を地域の方や他の若い子達が見ると、では私もあれを作りたい、これを作りたいとなっていくので、どんどんファブラボが活用されていくことになるのです。

実際に、地域の子達がハンダづけを学んだり、3Dプリンターのやり方を学んだりということも起き始めています。

それで大南さんが最近構想しているのが、神山町は高校があるのですけれども、農業高校のみですね。このため、みんな普通科に行きたかったら下宿して外に出なければいけないのです。そういう状況で、小中高一貫校を造るといったことを最近言い出していて、それはすごいと思っています。

もう一つ、牟岐町のほうですけれども、神山は結構30代の方の活躍が大きいのですけれども、牟岐町は20代前半、大学生の活躍が素晴らしいです。というのは、ハーバード大学

に行っていた小林亮介君という男の子がいて、彼が東京と小布施と徳島と、東北も今年から始まったのですが、ハーバードのHにラボで「H-LAB」というのをやっていて、海外の留学生、外国人もそうだし日本人留学生、さらに、日本の東大生、京大生みたいなスーパー大学生達を連れてきて、地域の高校生達に疑似留学の体験をさせるのです。リベラルアーツを教えていると彼らは言っているのですけれどもね。

そこで、徳島大学だったり大阪大学だったり、地域の普通の大学生達もそれに参加するのです。スーパー大学生達は1週間のサマースクールが終わると帰っていくのですけれども、残された地域の大学生達は、貴重な体験をしたと、変わっていくのです。彼らでNPO法人を立ち上げて、今度は彼らが地域の中学生達に教えよう、高校生達に教えようみたいなことを自主的にやってくれています。

なので、教育というのは地域を動かす大きなエネルギーになると思っています。なので、質問はすごくありがたいです。

○質問者 ありがとうございます。COCのとても良いモデルになるのではないかと、今、感じました。

それと、個人的には、アーカイブ棟に非常に興味がありますので、デジタルをぜひ立ち上げてくださると助かるなと思います。デジタルアーカイブも入れて。

○坂東氏 今、進められているみたいです。

○江崎氏 ありがとうございます。

今の神山の今後というお話でちょっとだけ補足させていただくと、私もサテライトで入っていますけれども、同じようにサテライトで家族で移住してきている企業の方達もいるのです。例えばその子供達が中学生になって、高校に行くときにどうするか。まさに今の問題に直面するわけです。神山でこのまま暮らせないかもしれない。せっかく家族で移住してきたのに、子供達だけどこか都会にやるということは問題です。まちづくり懇談会みたいなものを私達も入れていただけてずっとやっているのですが、学校をどうするかという、まさに一貫校と言いますか、インターナショナルスクールみたいなのを造ろうとか、外国の方も結構来ているので、全部英語でやる授業の学校を造ろうとか、色々な話が、半分冗談みたいな話なのですが、でも、結構神山だったらできるかもしれないみたいな話をしています。

廣瀬さんというウェブデザインの会社をやっている方がちょうど2児のパパなので白羽の矢が当たりまして、教育の担当になりまして、今、分校をちょっとずつ交渉して、最初はちょっと我々が例えば外部講師として入らせていただくとか、他には山なので、実際にイノシシを子供と一緒に解体するとか、そういった授業が神山ならできるというような授業をちょっとずつやりながら地域の学校みたいなものを造ったら良いかという話が本当に起こっているところです。

このため、多分、行政が何もやってくれないとか人口が減って学校が無くなってしまうという問題ばかりを考えるのではなくて、余りそういうことは、後づけなのですから、

外から入ってきた方達が、では、無いのだったら造ろうかというような発想になっているというのが神山の状況かなと思います。

では、他に質問はないでしょうか。無さそうですね。

では、私から質問です。空き家のリノベーションというのは、お金がかかるのではないかと普通は思うのです。先ほどの坂東さんのスライドの中で出てきた「えんがわオフィス」というのは、確かにお金がかかっています。プラットイーズというえんがわの会長さんはかなり投資をして造っていますが、でも、例えば私が入ったブルーベアオフィスなどは本当に改修された後に入っていますので初期費用としてはほとんどかけていないという状況ですけれども、その辺、何かポイントと言いますか、こつみたいなものはありますか。

○坂東氏 具体的な数字を言ってしまうと、あそこは420万円、改修にかかっています。浄化槽を追加したのが40万円ぐらいだったので、実際の工事は380万円です。大工さん2人が毎日来てくれていたので、1人当たり1万5,000円の3万円が20日分ぐらい、60万円ぐらいです。他に材料費などです。他にも左官屋さんがいたり板金屋さんがいたりします。

その中で、半分、220万は助成金が下りています。このため、グリーンバレーは200万しか払っていません。かつ、グリーンバレーはあの建物を川野さんという方から借りているのですが、多分、固定資産税分ぐらいしか払っていないのです。そのかわりソノリテさんから家賃もいただいているので、その分、3年ちょっとで回収できる計算です。

もう3年経っていますので、グリーンバレーは活動資金をそこで得られるようになっていたり、メンテナンスができるようになっていたりするはずですよ。それでまた次の空き家を改修していくというようなことも可能になってくるのかと思います。

○江崎氏 今のは私が入っているブルーベアオフィスの改修のお話ですけれども、数百万で、しかも計画的にちゃんと返せるような計画で無理なくできる方法になっている。

もちろん、坂東さんの人件費や学生さん達は全部ボランティアなのですね。

○坂東氏 そうですね。ただ、我々も、他に人材育成系の助成金をもらったので、交通費と、少し活動費も出ているので、誰も辛い思いはしていないと思います。

○江崎氏 安い労働力を探すのではなくて、こういう魅力的な人材を魅力あるプログラムで呼び寄せるとというのがこつかなと思いますけれども、そうは言ってもやはり何か元手が必要なきがあると思いますので、今日、実は日本政策金融公庫の方が、これからソーシャルビジネスなど、NPOも含めたところで融資を広げていただけるというお話がありますので、ちょっとだけその御紹介を斉藤さんからしていただきたいと思います。

○斉藤氏 ただいま御紹介いただきました日本政策金融公庫水戸支店の斉藤と申します。

私どもは国の成長戦略の中で、ソーシャルビジネスの支援を私どもとしても重点的に取り組んでいるところでございます。

つい先日、全国コミュニティ財団協会というところと公庫が、そうしたソーシャルビジネスにかかる連携協定を結ばせていただいております。それにつきましては、コモンズさんの情報誌が今日お手元の中に入っておりますが、その5ページにそうした背景が詳

しく御紹介をされていますので、ご覧いただければと思います。

私どもはそうした支援団体と各地域ごとにソーシャルビジネスのネットワークの立ち上げに現在取り組んでおりまして、現在、十数カ所でそういったネットワーク化が進んでいるのですが、今月、10月1日付で、皆さんちょうど今お手元で黄色いチラシをごらんいただいていると思うのですが、茨城県でもソーシャルビジネスというものに特化したネットワークを立ち上げさせていただきました。

そのメンバーとしては、私ども公庫と、コモンズさん、茨城県の行政書士会さん、水戸商工会議所さんという4機関が、ソーシャルビジネスのサポートということで、ネットワークの機関としてまずメンバーに入らせていただいております。

何が狙いかと申しますと、こうしたソーシャルビジネスに取り組んでいただく方々に色々な専門的な分野でアドバイスなりサポートをさせていただくのに、こうした支援機関がある程度まとまっていれば、どこに行ってもそうしたアドバイスなり専門的なこと、どういうところに行ったら良いのではないかなというようにことをタイムリーにそういった事業者の皆様に御紹介できるのかと思っております。

今後、まだ4つの機関で立ち上げたばかりでございますけれども、さらにこういった支援をしていただける例えば行政やあるいは専門の士業の団体やそうした方にもさらに声をかけて、よりソーシャルビジネスに向けた取組を支援させていただけるような体制を作らせていただければと思っております。

ぜひ、新しい事業の取組なりそうしたことで何か相談したいということがございましたら、こういったネットワークの機関に御相談いただければということで、御紹介させていただきます。

ありがとうございます。(拍手)

○江崎氏 ありがとうございます。

茨城県内では、コモンズが調査をしたところ、やはりNPO法人、地域活動などで融資を受けているところはまだまだ少ないということです。色々な課題があっても、資金が足りなくてできないという方も多かったのですが、大分その門戸が開かれるということです、これまた共助社会づくりに非常に力強い支援になるのかと思います。

最後に、もう一度皆さんから一言ずついただきたいと思うのですが、実は、今日ここに本当は横田が来るために、先ほどの石田さんと一緒に神山にも視察に行きまして、見てきたところなのです。本当はいろいろ横田としても言いたいことがあったと思うのですが、その替わりはできないのですが、横田と帰りの飛行機の中で話をしていたことがあります。

神山町は、先ほど見ていただいたようにビストロができたりピザ屋さんができたりして、どちらも予約が本当にとれないです。前日とかでは予約がとれなくて、1週間、2週間前にもう予約が埋まってしまうというぐらい、どちらも、本当にうまくと言いますか、人が集まってきています。

それは何なのかという話をしていました。なかなか空き家があったとしても、そこに例

えば投資をして改修をして新しいビジネスを始めるというのは勇気が要ることではないかという話をしたときに、もちろんビジネスプランを作るのですけれども、ビジネスをしたくて地域に入りたいというのではなくて、多分逆の考え方なのかなという話をしていました。

その地域の魅力にとりつかれて、そこの地域の方と仲よくなって、コミュニティーに入っていたときに、この町に足りないもの、例えば夜ちょっとおいしいワインが飲めるお店がこの町には無いとか、焼きたてのピザが食べられるお店が無いとか、そういった発想から、では、実は私はパンが焼けるのです。パン屋さんを開いてみたかったというようになると、本当に自然と周りの方が応援してくださるのです。

ごみ拾いから始まったという話もあったと思うのですけれども、グリーンバレーもそうです。ごみ拾いや、山づくりといって落ちているごみを拾うボランティア活動や山の間伐が毎週あって、私なども神山にいるときはそういうのに参加させてもらう。そうして、地域の方と一緒にしてお昼を食べたりする。

そういう関係ができてくると、その中でビジネスが生まれる。皆が支えてくれるので本当に失敗しないという感じがしています。

それぞれ、皆さん御自身の地域でこれからも活動をますますされていくというところだと思うのですけれども、そういったところを踏まえまして、これからの活動をこういふところをポイントにしてやっていきますというようなことを、三縄さんのほうから一言ずついただいて、最後に坂東さんに一言いただいて締めたいと思いますので、お願いいたします。

○三縄氏 こまじいのうちは、立ち上げて2年半、今は一定のレベルで活動しているのですけれども、今後、少し広く地域に目を向けていきたいと思います。

資金繰りがやはり厳しいというか、ボランティアの人にはそれなりの交通費や弁当代くらいは出していくようなことをしていかないと長続きしないのかと思います。それでも文京区の方は結構お金持ちが多いので、飲み会をやりましょうと言うと、おばあちゃんでもお母さんでもいっぱい料理を作ってくれたりしますが、あまりご厚意に甘えてばかりではいけない。地域の中でコミュニティビジネスなども考え地域に貢献しながら何かお金が得られる手段を考えていきたいと思います。

今、すけっと隊というのもあるのですけれども、それを少し拡大する、文京区には一軒家のひとり暮らしの高齢者が多いので高齢者の見守り、水やりができないからやってくださいというニーズなど、市場をリサーチして、コミュニティビジネスに繋げていけるような仕掛けを作りながら、地域の社会でコミュニティーの醸成を図っていきたい。みんなで楽しく過ごせるような地域社会をつくっていければなと思っています。

以上です。

○江崎氏 ありがとうございます。

共生というキーワードをいただきました。

では、続いて大坪さん、お願いします。

○大坪氏 今日には本当にたくさん刺激をいただいた感じがします。

坂東先生の神山にぜひ1回行ってみたいなと思いました。本当にわくわくするような。

ただ、やはり江崎さんが言われたように、そのコミュニティーにいかに関わりついていくか。三縄さんや石田さんのお話でも、やはり人間にとってそのコミュニティーの大切さというのが大きなキーポイントではないかと思います。そこを大切にしていこうということが大事なのではないかということを改めて感じました。

ありがとうございました。

○江崎氏 ありがとうございます。

石田さん、お願いします。

○石田氏 今日のような機会に現状をお話しさせていただいて、すごく良かったと思います。

あと、神山に行って、神山にはないけれども茨城にはあるというものを、自分なりに気づいたと言いますか感じたことがあるので、それを皆様にお伝えしたいと思います。

茨城県には過疎地と言われている場所があるかもしれませんが、そこにはまだ地元の若者達がたくさんいて、その人達が頑張る活力というのはまだまだたくさんあると思います。それを力に、茨城県でもっと頑張って一緒に行きたい。

そして、きょう集まってくれた人達は空き家、移住などに少しでも関心がある人達だと思うので、ぜひ、福島がそういう時期が来たら力を貸していただきたいと思います。

以上です。

○江崎氏 ありがとうございます。

では、最後に坂東さん、お願いします。

○坂東氏 最初のプロフィールで私はスキーマ建築計画というところに行っていたのですが、建築家やデザイナーになるには、今までは先輩のデザイン事務所に行ったりという道しかなかったのです。それが本当に辛い。給料は少ないし、睡眠時間は少ないし、自由時間は全然ない。

最近はその心で心を壊してしまう子達も増えてきている中で、鴻野祐君という、先ほど家具デザインのワークショップを一緒にやった男の子が成長して、新しい未来が見えたのです。彼は大学を卒業してすぐ神山に行って、そこで本当に伸び伸びと、地域の人から色々な仕事をもらいながら、気づいたらちゃんとしたデザイナーになっていた。新しい職業訓練の道が地域の中にはあるのだということに気がきました。

ぜひ、皆さんも若者を温かく迎えていただきたいのですが、同時に、ワークショップをやっているのは、あれだけ神山が注目されているのに、神山のワークショップに参加してくれる学生は年々減ってきているのです。

それはどういうことかと言うと、他の地域でも学生を必要とし始めていて、どんどん他の地域を自分達で見つけてきたり、先生から紹介されて、活動し始めているのです。

今日、神山の話や他の地域の話聞いて、単純に面白かったと、家に帰って良かった良かったみたいな感じで終わるのではなくて、では今から自分だったら何をやろうという、そういうことをぜひ考えてもらえたらなと思っています。

そのときに、ここが一番重要だと思うのですけれども、自分が楽しいと思うことをやるようにしてもらえると良いと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

○江崎氏 ありがとうございました。

それでは、そろそろパネルディスカッションの終わりの時間になります。3人の事例の方、東京都の文京区、それから笠間市と、浪江から日立移住してきた石田さん、それぞれに人口や町の大きさ、全て違いがあると思うのですけれども、ポイントとしては、やはり楽しくやるということと、ちょっと言い方が良くないかもしれませんが、一流なのです。坂東さんは実は多分正規にお願いするととても高い建築家さんだと思うのですけれども、やはりそこはお金ではない価値観みたいところで共有できると大きな力が届くのかと思います。

茨城もたくさんそういったチャンス、資源がある地域ではないかと思って、我々茨城NPOセンター・コモンズでも色々な地域づくりをこれからまたやっていきたいと思っています。ぜひ、きょう来ていただいた皆様と一緒にまた地域づくりをやっていききたいと思っていますので、今後ともよろしく願いいたします。

では、本日御登壇いただきました皆様、本当にありがとうございました。(拍手)

○司会 三縄様、大坪様、石田様、坂東様、江崎様、どうもありがとうございました。

以上でパネルディスカッションを終了いたします。皆様、いま一度、盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

ありがとうございました。

最後に、閉会に当たりまして、茨城県生活環境部県民運動推進室長、橋本由美子より御挨拶を申し上げます。

○橋本室長 御紹介をいただきました茨城県の県民運動推進室の橋本でございます。

本日は「共助社会づくりフォーラム2015 in 茨城」に御参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

閉会に当たりまして、一言御挨拶を申し上げさせていただきます。

まずもって、先月の関東・東北の豪雨に際しまして、被災された皆様方に心からお見舞いを申し上げます。また、本日御出席の皆様方の中にも、これまでも復旧・復興に御支援いただいておりますと思います。改めて敬意を表する次第でございます。

県といたしましても、災害本部を中心といたしまして、これまでも様々な支援をしてまいりましたが、今、約1カ月弱ということでございますが、これからが大変な時期であるということをNPOセンター・コモンズの横田の方からも直接伺っておりまして、県といたしましても引き続き復旧に向けた支援と一緒に取り組んでいきたいと考えておりますので、

皆様方にも引き続き御支援をいただきたいと思いますと思っております。

さて、本日のフォーラムですが、空き家ということをテーマに開催をさせていただきました。御登壇いただきました皆様、そして参加の皆様方には、長時間にわたりまして最後まで熱心に御議論いただき、ありがとうございます。

本日の皆様方が感じられたことを今後の活動に生かしていただきますとともに、ぜひとも、地元あるいは地域に帰りまして、皆様方に本日のお話なども広めていただけたらなと感じております。

結びになりますが、皆様方の今後のますますの御活躍、そして御健勝を御祈念申し上げます。閉会の御挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。（拍手）

○司会 以上をもちまして、本日のプログラムは終了とさせていただきます。

皆様、お忘れ物などございませんよう、お気をつけてお帰りください。

なお、お帰りの際は、アンケート用紙に御記入の上、受付までお持ちくださいますようお願いいたします。

以上をもちまして「共助社会づくりフォーラム2015 in 茨城」を終了させていただきます。本日の御参加、まことにありがとうございました。